京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-5

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇一八-五

大藪遺跡・下久世構跡

大藪遺跡・下久世構跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

大藪遺跡・下久世構跡

2019年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、工場新築工事に伴う大藪遺跡・下久世構跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

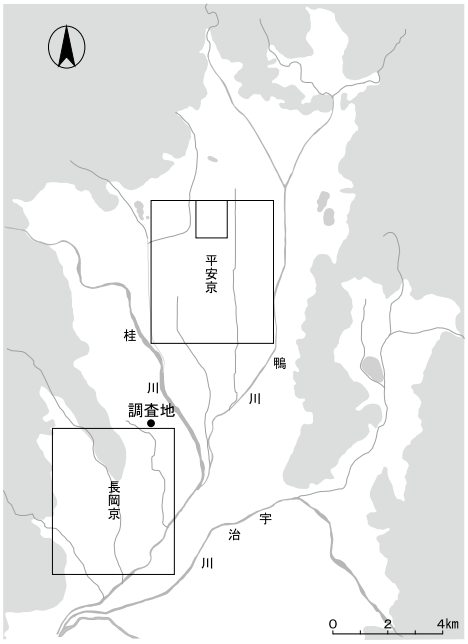
平成31年２月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	大藪遺跡・下久世構跡　（京都市番号　18 S 203）
2	調査所在地	京都市南区久世殿城町526番地１
3	委　託　者	京都フードパック株式会社　代表取締役社長　玉水小百合
4	調 査 期 間	2018年９月10日～2018年10月23日
5	調 査 面 積	309㎡
6	調査担当者	末次由紀恵
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「久世（平成16年）」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	末次由紀恵
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査に際して、下記の方々からご指導・ご教示を頂いた。記して、感謝を申し上げます（五十音順）。 伊藤淳史氏、國下多美樹氏、森岡秀人氏、若林邦彦氏



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）位置と環境 …… 3
（２）周辺の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 6
（１）基本層序 …… 6
（２）遺構の概要 …… 6
（３）第１期の遺構 …… 6
（４）第２期の遺構 …… 10
４．遺　　物 …… 19
（１）出土遺物の概要 …… 19
（２）土器類 …… 19
（３）瓦類 …… 25
（４）石製品 …… 25
（５）木製品 …… 25
５．ま と め …… 27

図　版　目　次

図版１　遺構　１　第１期全景（西から）
２　溝234土器出土状況（北東から）
３　溝234土器群（北東から）
図版２　遺構　１　第２期全景（西から）
２　建物１・柱列１（北西から）
図版３　遺構　１　井戸111枠内（南から）
２　井戸203枠内（南から）
３　建物３柱穴40（南から）
４　建物３柱穴254（南から）
図版４　遺物　土器類
図版５　遺物　土器類
図版６　遺物　土器類

挿　図　目　次

図１　調査地位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査前全景（南西から）　……　2
図３　作業風景（南東から）　……　2
図４　調査区配置図（１：500）　……　2
図５　周辺調査位置図（１：5,000）　……　5
図６　調査区西壁・南壁断面図（１：100）　……　7
図７　第１期遺構平面図（１：150）　……　8
図８　方形周溝墓233断面図（１：50）　……　8
図９　溝234実測図・土器出土状況図（１：80、土器の縮尺は１：10）　……　9
図10　第２期遺構平面図（１：150）　……　10
図11　建物１実測図（１：80）　……　11
図12　柱列１実測図（１：80）　……　11
図13　建物２実測図（１：80）　……　12
図14　柵１・２、溝232実測図（１：80）　……　14
図15　井戸111・203・205実測図（１：50）　……　15
図16　建物３実測図（１：80）　……　17
図17　柵３・４実測図（１：80）　……　18
図18　方形周溝墓233出土土器実測図（１：４）　……　20
図19　溝234出土土器実測図１（１：４）　……　21
図20　溝234出土土器実測図２（１：４）　……　22
図21　第２期遺構出土土器実測図（１：４）　……　24
図22　出土瓦拓影及び実測図（１：４）　……　25
図23　出土石製品実測図（１：４）　……　25
図24　出土木製品実測図（１：４）　……　25
図25　遺構変遷図（１：300）　……　28
図26　周辺遺構変遷図（１：1,000）　……　29

表　目　次

表１　周辺調査一覧表 …… 4
表２　遺構概要表 …… 6
表３　遺物概要表 …… 19

付　表　目　次

付表１　土器一覧表 …… 31
付表２　瓦類・石製品・木製品一覧表 …… 34

大藪遺跡・下久世構跡

１．調査経過

調査地は、京都市南区久世殿城町に位置し、弥生時代から平安時代の集落遺跡である大藪遺跡および、中世の居館跡である下久世構跡に含まれる。

当該地に工場新築工事が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、弥生時代や中世の遺構が遺存していることが明らかとなり、遺跡の実態を把握するために発掘調査が必要と判断された。調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。

調査は、調査区を京都市文化財保護課の指示に従い設定し、2018年９月10日から開始した。調査面積は309㎡である。試掘調査の結果とこれまでの周辺調査成果から、弥生時代の集落に関する遺構、長岡京期の遺構、中世の居館に関する遺構の検出を想定して発掘調査を行った。

重機によって表土を掘削し、それ以降は人力で掘削を行った。基盤層上面ですべての遺構を検出し、その中で時期を大きく２つに分け、第１期を弥生時代、第２期を平安時代から室町時代として調査を行った。現場作業は、10月23日にすべて終了した。

図１　調査地位置図（１：5,000）

図２　調査前全景（南西から）

図３　作業風景（南東から）

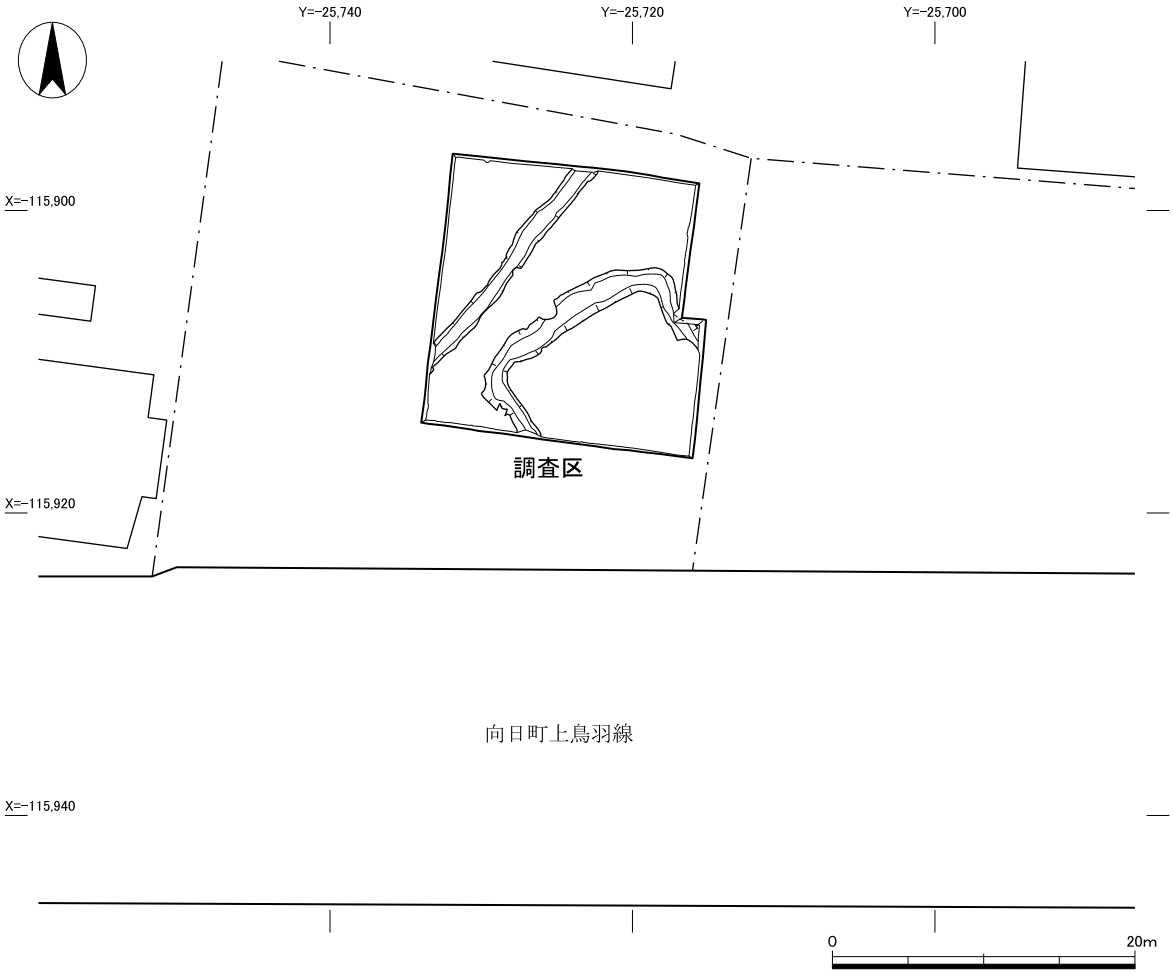


図４　調査区配置図（１：500）

２．位置と環境

（１）位置と環境

調査地は、京都市南西部の桂川西岸にあり、桂川水系の沖積地に立地する。弥生時代から平安時代にかけての集落跡である大藪遺跡の西部、また、中世の居館跡である下久世構跡の南東部に位置する。

これまでの周辺の調査から、調査地北側を北西から南方向にかけて流れる旧河川の存在が明らかとなっている。旧河川は弥生時代から室町時代まで存続しており、大藪遺跡や北西にある中久世遺跡などは、この旧河川沿いの微高地に築かれた集落跡である。

また、調査地は長岡京の北限より約200ｍ北にあり京域外ではあるが、周辺の調査では長岡京期のものとみられる遺構もみつかっている。

中世になると在地の有力者によって集落に居館が造られたとされるが、築城時期や存続期間などの詳細は良くわかっていない。

（２）周辺の調査（図５、表１）

調査地周辺では多数の発掘調査が実施されており、主要なものを図５、表１にまとめた。

大藪遺跡は弥生時代から平安時代の遺跡とされるが、図５－18では縄文時代の遺構が検出されており、また他の調査でも縄文時代のものとみられる遺物が出土していることから、弥生時代以前も人々がこの周辺地で活動していたことがわかる。

弥生時代の遺構については、周辺調査で弥生時代から室町時代まで存続する旧河川の存在が明らかとなっているが、その両岸で竪穴建物や方形周溝墓、溝が多数検出されている。特に今回の調査地に近い場所では、大型の竪穴建物や方形周溝墓（図５－11）、また、独立棟持柱付の大型掘立柱建物（図５－13）・掘立柱建物（図５－19）などが検出されている。これらの遺構は大型であることや、京都盆地の弥生時代の集落ではほとんどみられない独立棟持柱を持つ掘立柱建物が２棟もみつかっていることから、この集落の特殊性が認められる。

長岡京期の遺構については、大藪遺跡の大半は京外となっているが、この時期の掘立柱建物や溝などの遺構が確認されている。図５－11・18では、長岡京の坊間小路の北側延長にあたる場所で溝を検出しており、この周辺にも何らかの整備が行われていたことが考えられる。

鎌倉時代から室町時代については、建物や井戸、溝や堀などの遺構が多数検出されている。図５－11では建物の他に東西方向の大規模な堀がみつかり、図５－15でみつかった堀と合わせて、下久世城や下久世構などの居館の区画の堀と考えられている。

表１　周辺調査一覧表

調査番号	調査年	主な遺構	主な遺物	文　献
1	1972	奈良～長岡:溝状流れ。奈良:杭列。	弥生:弥生土器。古墳:土器類。奈良～長岡:土器類、人面土器、土馬、木製品、獣骨など。平安～鎌倉:土器類、瓦。	梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会　1973
2	1979	弥生:溝、柱穴。中世:溝。	弥生:弥生土器。	磯部　勝「77　大藪遺跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　2012
3	1980～1981	弥生中期:溝(杭跡)。長岡～平安:溝。鎌倉:建物、柱跡、井戸、土坑、溝。	縄文:縄文土器。弥生:弥生土器、木製品、石鏃。長岡～平安:土器類。鎌倉:土器類。	平田　泰『大藪遺跡発掘調査概要　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター　1981
4	1981	弥生～古墳:流路。長岡:遺物包含層。	弥生～古墳:自然木片。長岡:須恵器、土師器、瓦。	磯部　勝「58　大藪遺跡」『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1983
5	1983	奈良～平安:流路(杭列)。	縄文:縄文土器。弥生:弥生土器。古墳:土器類。奈良:土器類、土製品。平安:土器類、土製品。鎌倉～室町:土器類、木製品。	堀内明博・鈴木廣司「46　大藪遺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1985
6	1985	時期不明:落ち込み、流路(杭列)。	弥生～平安:土器類、木製品。鎌倉～室町:土器類。	上村和直・久世康博「43　大藪遺跡」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1988
7	1986～1987	弥生～平安:流路。弥生:溝、土坑。長岡:溝。平安:溝、土坑。鎌倉以降:柱穴、溝、土坑。	弥生:弥生土器、木製品。古墳:土器類。奈良:土器類、木杭。平安:土器類、瓦類、木製品。鎌倉以降:土器類、木製品。	吉崎　伸「16　大藪遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1991
8	1987	弥生:竪穴建物。奈良:流路(護岸施設)。鎌倉:濠。	弥生:弥生土器、石鏃。古墳:土師器、須恵器。奈良:土師器、須恵器。平安:土師器、須恵器。鎌倉:木製品。	鈴木廣司『大藪遺跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局　1988
9	1987	弥生:掘立柱建物、柱穴。弥生～古墳:竪穴建物、溝。長岡:柱穴。	弥生:弥生土器、石器。古墳:庄内式土器、布留式土器。飛鳥:土師器、須恵器。	上村和直「長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989
10	1988	鎌倉～江戸前期:掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑、溝。江戸中期:礎石・根石、土坑、溝。	鎌倉～室町:土器類。江戸:土器類。	吉崎　伸「大藪遺跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報　昭和63年度』京都市文化観光局　1989
11	1990	弥生:竪穴建物、方形周溝墓。古墳:竪穴建物、土壙墓、掘立柱建物、溝。長岡:掘立柱建物(総柱)、柵。室町:小溝群。	弥生:弥生土器。	鈴木廣司「35　長岡京左京一条三坊・大藪遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　1994
12	1997～1999	弥生:竪穴建物、方形周溝墓、溝。長岡:掘立柱建物、井戸、柵、溝。平安後期:井戸、溝。室町:掘立柱建物、礎石建物、井戸、堀、溝。	弥生後期:弥生土器、木製品、ガラス玉。長岡:土師器、須恵器、瓦、木製品、獣骨。平安後期:木製品。室町:土師器、瓦器、陶磁器、木製品。	西大條 哲・出口 勲・吉崎 伸「24　大藪遺跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　2000
13	1999～2000	弥生:竪穴建物。平安:土坑。鎌倉～室町:掘立柱建物、柵、井戸、溝、堀。桃山～江戸:掘立柱建物、柱穴、柵、溝、土坑、井戸、堀。	縄文:縄文土器。弥生:弥生土器。古墳～奈良:土器類。平安:土器類。鎌倉～室町:土器類、木製品、金属製品、石製品。桃山～江戸:土器類、木製品、金属製品、石製品。	吉崎　伸・出口　勲・西大條 哲・宮下則子「19　大藪遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所　2002
14	2001	弥生:大型掘立柱建物。長岡:掘立柱建物、溝。	弥生:弥生土器。長岡:土器類、瓦。	小泉信吾・千喜良淳『大藪遺跡発掘調査報告書』大藪遺跡発掘調査団・安西工業株式会社調査部　2002
15	2006	弥生:方形周溝墓。平安:土坑。室町:建物、溝。	弥生:弥生土器。平安:土器類。室町:土器類。	平田　泰『中久世遺跡・大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-19　2007
16	2006	弥生後期:竪穴建物、炉、土坑、溝。平安～鎌倉:柱穴。室町:建物、柱穴、堀。	弥生:弥生土器、石器。平安後期～鎌倉:土器類。室町:土器類。	西森正晃『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32　2007
17	2010	長岡:土坑。室町～江戸:掘立柱建物、柱穴、柵、堀、溝、井戸、土坑。	弥生:石器。古墳:須恵器。長岡:土器類、瓦、土製品。室町～江戸:土器類、木製品、金属製品、土製品、石製品。	木下保明・近藤章子・竜子正彦『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9　2010
18	2010	室町～江戸初期:建物、門、柱穴、柵、井戸、堀、溝、土坑。江戸:柱穴、溝、水路、土坑。	弥生:石鏃。古墳～平安:土器類。室町～江戸初期:土器類、金属製品、石製品、木製品。	南出俊彦・田中利津子『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-13　2011
19	2011	縄文:土坑。長岡:溝、井戸。室町後期:建物、柵、溝、井戸、土坑。江戸:溝、畔。	縄文:縄文土器。長岡～平安:土器類、石製品、木製品。室町後期:土器類、金属製品、石製品、木製品。江戸:金属製品、石製品。	山本雅和・田中利津子『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-18　2011
20	2011	弥生:溝、掘立柱建物、溝、落込み、土坑。中世:溝、柵。	弥生:弥生土器、木製品。中世:土師器。	上村和直「大藪遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成24年度』京都市文化市民局　2013
21	2012	長岡～平安:溝。室町:柱穴、土坑。江戸:堀、溝、土坑。	長岡～平安:土器類。室町:土器類、銭貨。江戸:土器類、銭貨、木製品。	尾藤徳行『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-6　2012
22	2012～2013	弥生:竪穴建物。		小檜山一良・津々池惣一「大藪遺跡・下久世構跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成25年度』京都市文化市民局　2014
23	2015	弥生～古墳:竪穴建物、方形周溝墓、杭列、土坑。長岡～中世:溝、土坑。中世～近代:溝、土坑。	弥生～古墳:弥生土器、土師器、土製品、木製品、石製品、金属製品。長岡～中世:土師器、須恵器。中世～近代:須恵器、石製品。	兼康保明ほか『長岡京跡・大藪遺跡』イビソク京都市内遺跡調査報告第13輯　(株)イビソク関西支店　2016
24	2017	弥生:流路、溝、土坑。平安:土坑。	弥生:弥生土器。平安(長岡):須恵器、緑釉陶器、瓦。鎌倉～室町:焼締陶器。	新田和央「大藪遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成28年度』京都市文化市民局　2017

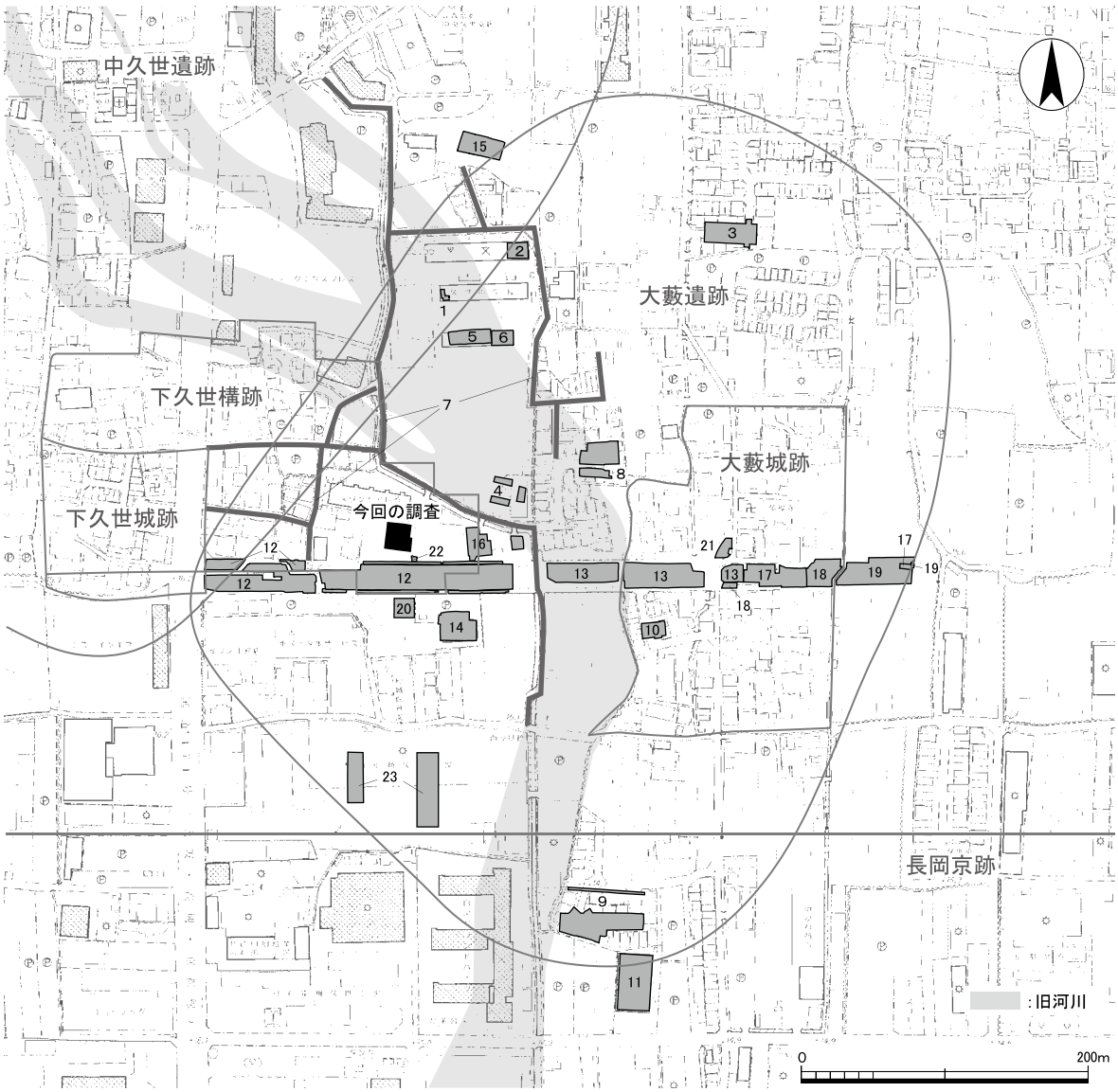


図５　周辺調査位置図（１：5,000）

３．遺　　構

（１）基本層序（図６）

調査地は、現状では全体が現代盛土で整地されており、現地表面の標高は15.7～15.9ｍで、西から東へ向かい若干低くなる。現地表面から－0.5～0.6ｍまでが現代盛土で、その下およそ－0.7ｍまで近世耕作土が堆積する。近世耕作土を除去すると基盤層となる。基盤層上面の標高はおよそ15.1ｍで平坦である。基盤層は調査区全体に暗灰黄色混じりの褐色シルトが広がるが、南東部の一部では礫混じりの灰黄褐色中砂になる。遺構はすべてこの基盤層上面で検出した。

（２）遺構の概要

今回検出した遺構は、弥生時代後期、平安時代、鎌倉時代、室町時代のものである。

遺構はすべて同一面で検出したが、第１期（弥生時代後期）、第２期（平安時代から室町時代）の大きく２時期に分けて調査を行った。

主な遺構としては、弥生時代後期の方形周溝墓と溝、平安時代から室町時代各時期の建物、柵、溝などがある。

（３）第１期の遺構

弥生時代後期（図７、図版１）

方形周溝墓233（図８）　調査区の南東部で、方形周溝墓の周溝を検出した。周溝の南東部分は調査区外に延長するため検出できなかった。主体部は後世の削平によって失われたと考えられる。周溝の規模は約15ｍ×13.5ｍ以上、深さ0.55～0.8ｍ、最大幅は約0.8ｍある。断面形は幅の広いＵ字形で、北西辺の中央付近が最も深く、北東・南西隅部では浅くなる。主軸方位は、北に対し西へ約30度振れる。埋土は大きく上下２層に分かれ、北西辺の断面では上層と下層の間に掘り込まれた痕跡（図８－Ｂライン５層）が確認でき、周溝が埋まる過程で、何らかの作業が行われた可能性が考えられる。遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が主に上層から出土した。

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構
弥生時代後期	方形周溝墓233、溝234
平安時代	建物１、柱列１、柱穴37
鎌倉時代	建物２、柵１・２、溝232、井戸111・205
室町時代	建物３、柵３・４、井戸203

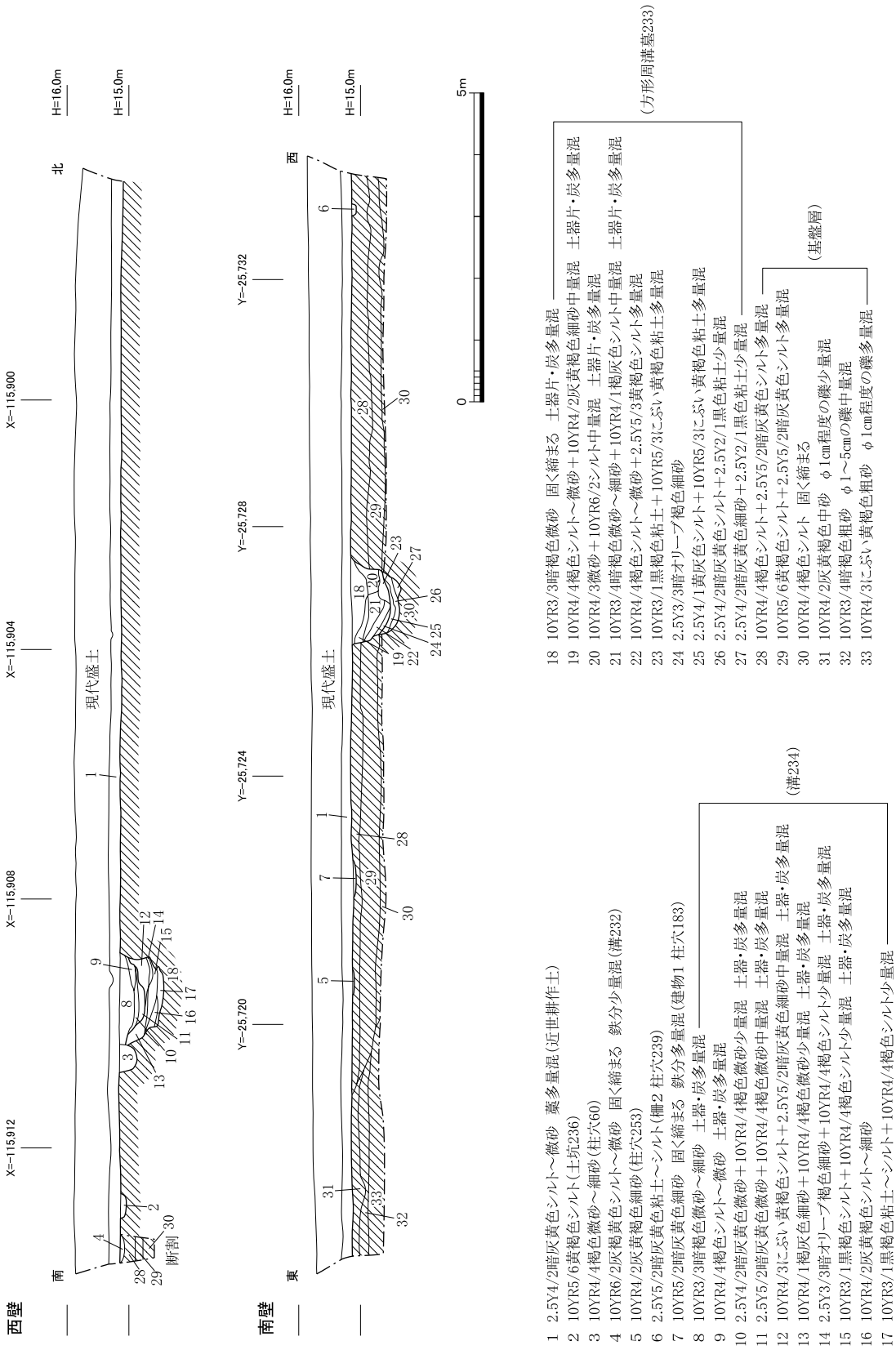


図６　調査区西壁・南壁断面図（１：100）

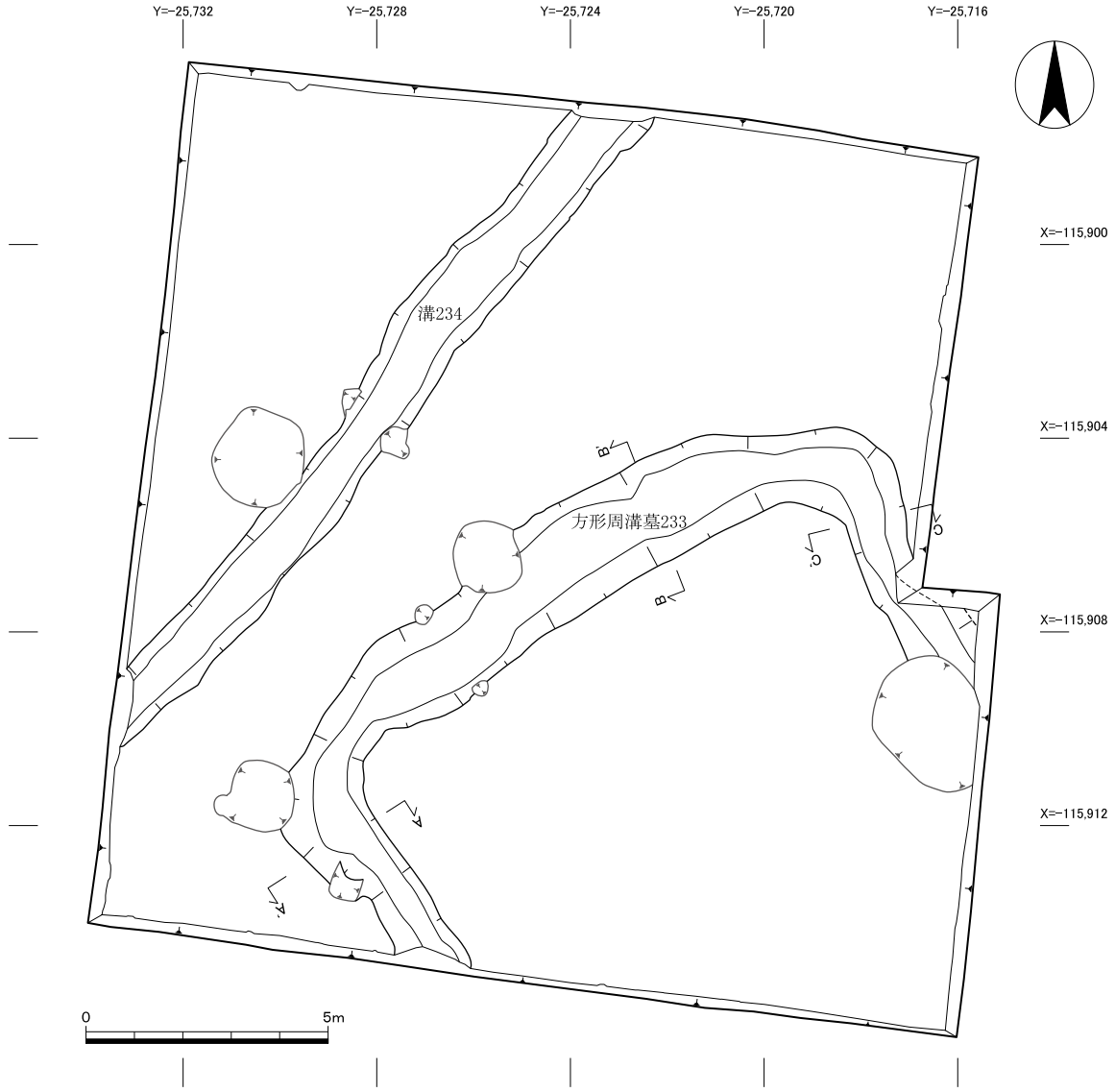
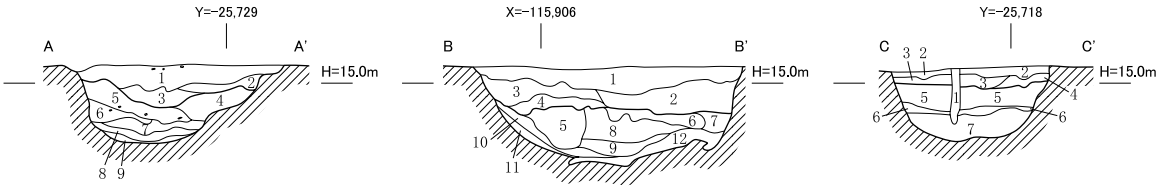


図７　第１期遺構平面図（１：150）



1　10YR3/3暗褐色細砂　固く締まる
　土器片多量混
2　10YR4/3にぶい黄褐色微砂～細砂
　固く締まる　土器片多量混
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂　土器片多量混
4　10YR4/6褐色細砂
　＋2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂多量混
　土器片多量・炭少量混
5　10YR3/3暗褐色微砂
　＋10YR4/4褐色細砂中量混　土器片多量混
6　10YR4/4褐色シルト～微砂
　＋10YR4/1褐灰色シルト多量混
　土器片多量混
7　10YR4/6褐色微砂
8　10YR4/4褐色シルト
9　2.5Y5/3黄褐色細砂

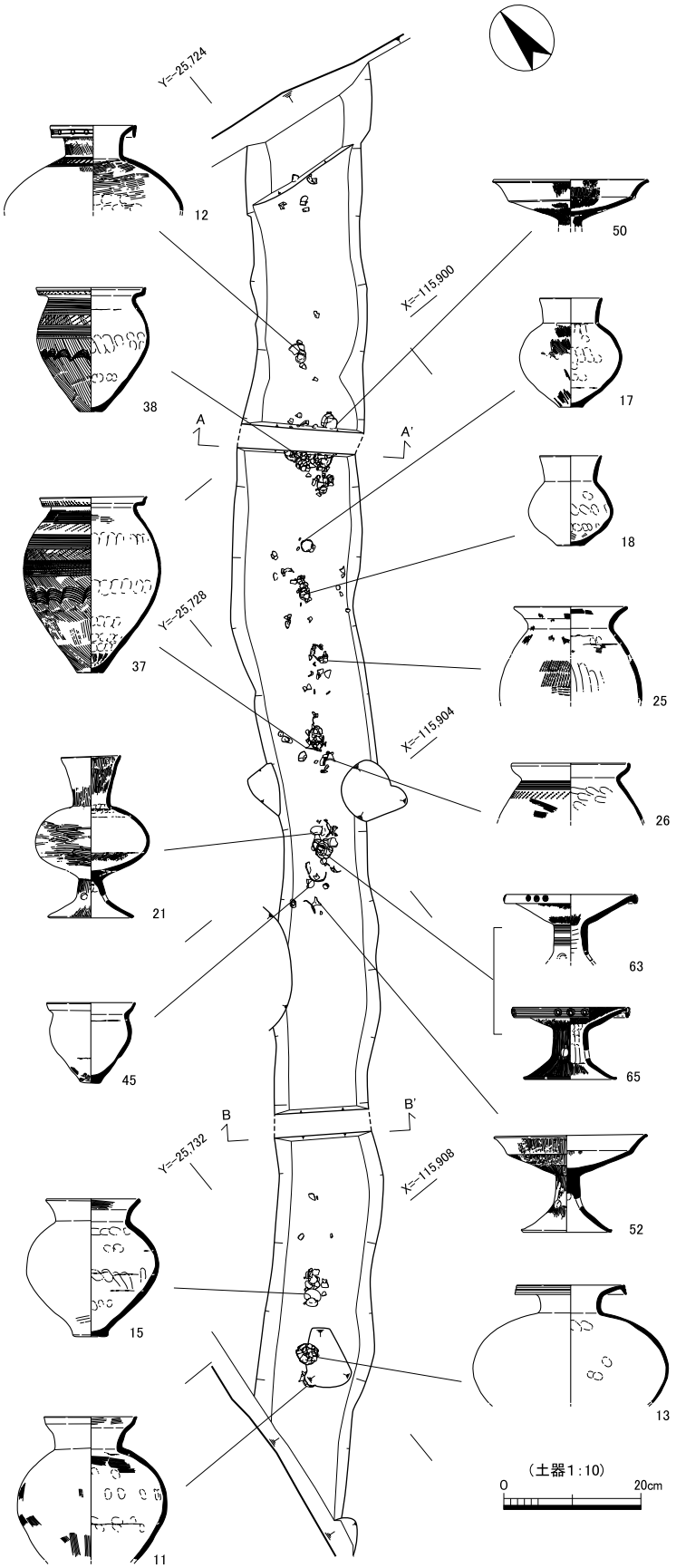
1　10YR3/2黒褐色シルト～微砂　固く締まる
　土器片多量混
2　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～微砂
　固く締まる　土器片多量混
3　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　土器片多量混
4　2.5Y4/1黄灰色シルト　土器片多量混
5　2.5Y5/3黄褐色粘土～シルト　炭少量混
6　2.5Y4/1黄灰色シルト～微砂　土器片少量混
7　10YR4/6褐色細砂
8　10YR4/4褐色微砂～細砂　固く締まる
9　10YR4/4褐色粘質細砂
10　10YR3/1黒褐色シルト
　＋10YR5/3にぶい黄褐色シルト中量混
11　2.5Y5/2暗灰黄色微砂　炭少量混
12　10YR3/1黒褐色シルト
　＋2.5Y5/2暗灰黄色粘土多量混

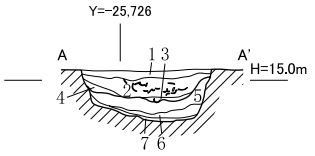
1　2.5Y4/2暗灰黄色細砂(杭)
2　2.5Y6/3にぶい黄色微砂
　固く締まる　土器片中量混
3　2.5Y4/2暗灰黄色微砂～細砂
　土器片中量混
4　2.5Y6/2灰黄色シルト　固く締まる
　土器片中量混
5　2.5Y5/1黄灰色細砂
　＋10YR4/4褐色微砂少量混
　炭少量混
6　10YR4/4褐色粘質微砂
7　10YR4/4褐色粘質シルト

※ 断面の位置は図7参照。

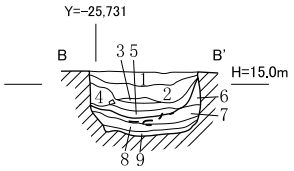
0　2m

図８　方形周溝墓233断面図（１：50）





1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～微砂
　固く締まる　土器・炭多量混
2　10YR4/2灰黄褐色シルト
　＋10YR4/4褐色微砂中量混
　土器・炭多量混
3　2.5Y4/1黄灰色粘土～シルト
　土器・炭多量混
4　2.5Y5/1黄灰色微砂～細砂
5　10YR4/6褐色シルト
　＋2.5Y5/3黄褐色粘土
　・2.5Y4/1黄灰色粘土中量混
　土器片少量混
6　2.5Y5/3黄褐色粘土
　＋2.5Y4/1黄灰色粘土中量混
7　2.5Y4/2暗灰黄色細砂
　＋2.5Y5/3黄褐色粘土
　・2.5Y4/1黄灰色粘土少量混



1　10YR4/3にぶい黄褐色微砂
　固く締まる
2　10YR4/2灰黄褐色シルト
　＋10YR4/4褐色微砂多量混
3　2.5Y4/2暗灰黄色微砂～シルト
4　10YR4/6褐色シルト
　＋10YR4/2灰黄褐色シルト中量混
5　10YR4/1褐灰色粘土～シルト
　＋2.5Y5/2暗灰黄色粘土極少量混
6　2.5Y4/4オリーブ褐色シルト～微砂
7　2.5Y3/1黒褐色粘土～シルト
　＋2.5Y5/2暗灰黄色粘土多量混
8　2.5Y3/1黒褐色粘土～シルト
　＋2.5Y5/2暗灰黄色粘土～細砂多量混
9　2.5Y4/2暗灰黄色細砂
　＋2.5Y3/1黒褐色粘土少量混

0　2m

図９　溝234実測図・土器出土状況図（１：80、土器の縮尺は１：10）

溝234（図９、図版１） 調査区北西部で検出した北東から南西方向の溝で、両端とも調査区外となる。検出長は約16ｍあり、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.5～0.7ｍある。断面形は方形で、溝底の標高は北壁際で14.6ｍ、西壁際で14.4ｍと北東から南西にかけて低くなり、調査区内において約0.2ｍの差がある。埋土は大きく上下２層に分かれ、主に上層から弥生時代後期の土器が多量に出土した。出土土器のなかには完形に近いものもある。

（４）第２期の遺構

平安時代（図10、図版２）

建物１（図11、図版２） 調査区南側で検出した掘立柱建物である。東西３間×南北１間以上で北庇をもつ東西棟とみられるが、総柱建物の可能性も考えられる。建物の南部分は調査区外で検出できなかった。身舎は東西の柱間約２ｍ、南北の柱間約2.5ｍ。建物方位は北に対して西へ約４度振れる。柱穴の掘形は隅丸方形か隅丸長方形で、一辺0.5～0.7ｍ、柱痕跡の径は0.15～0.22ｍある。

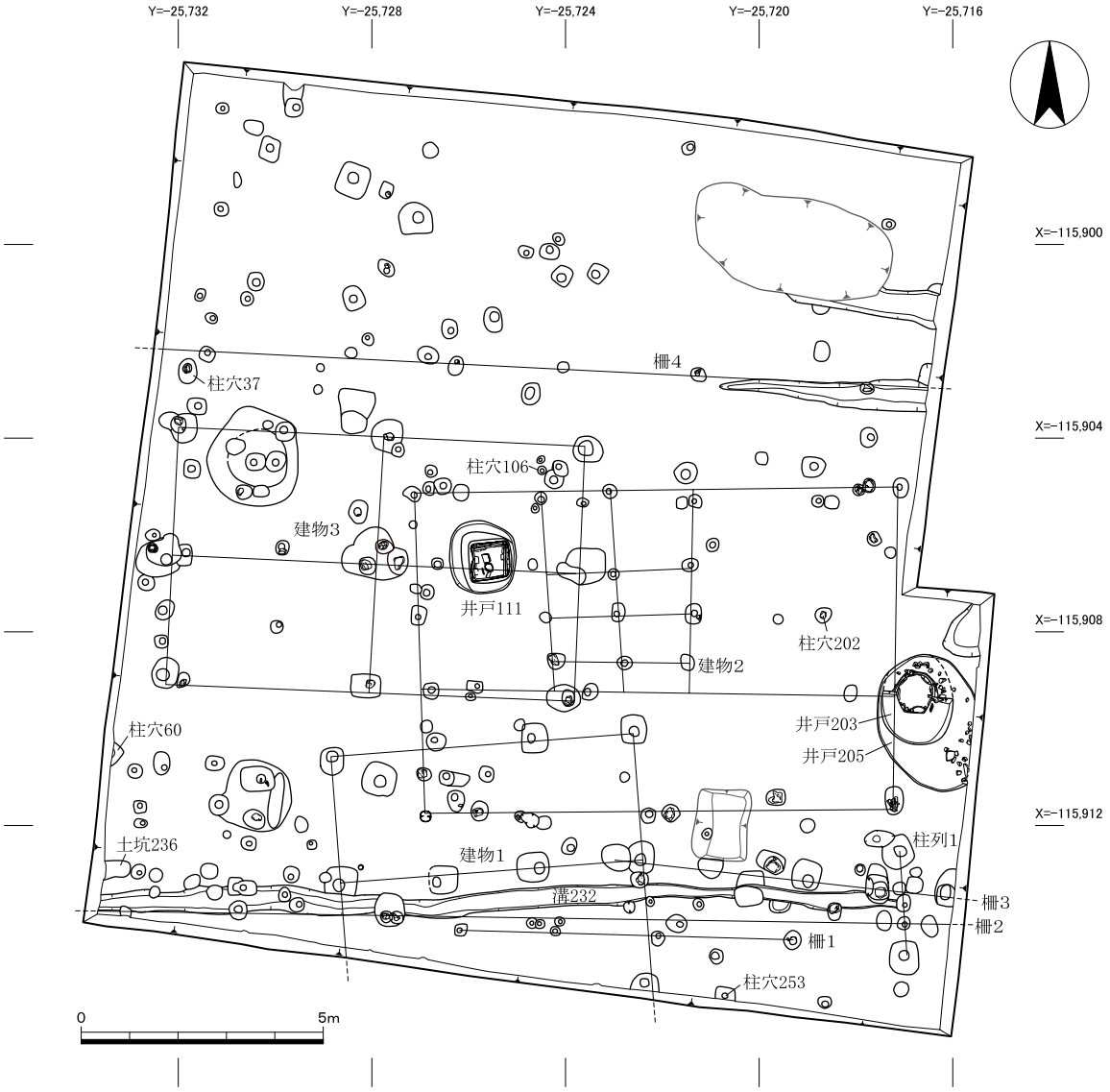
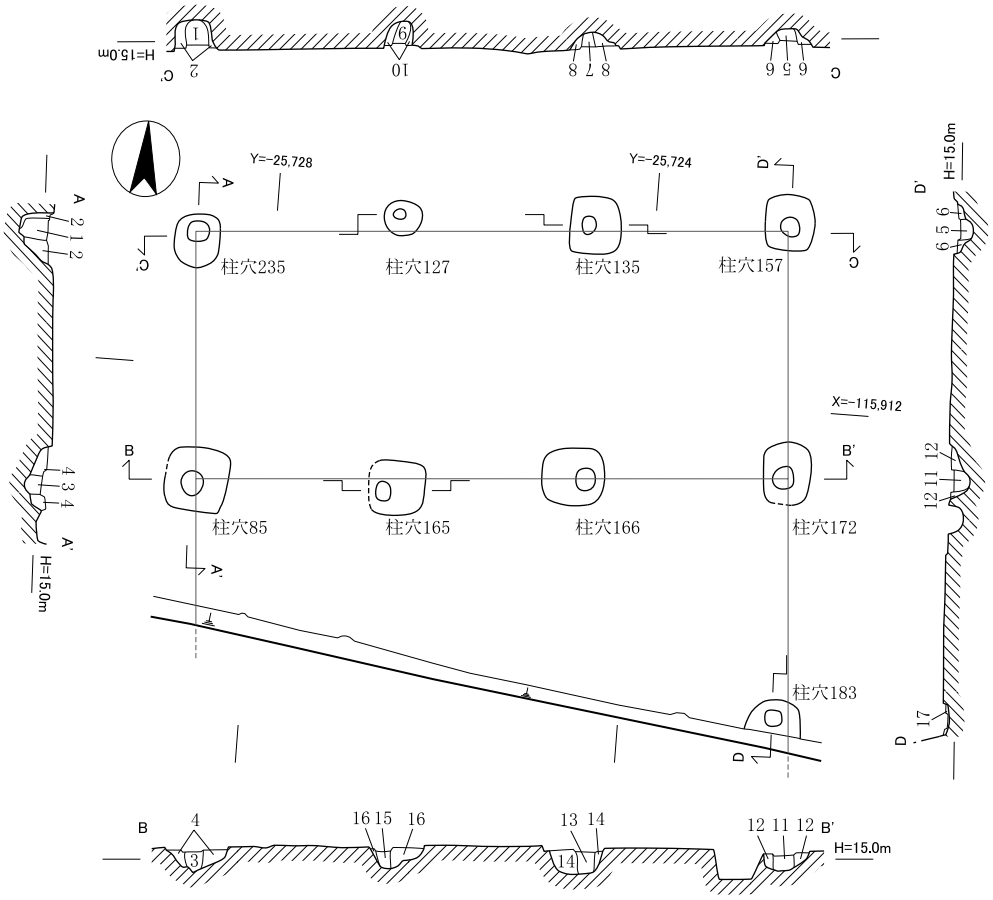


図10　第２期遺構平面図（１：150）



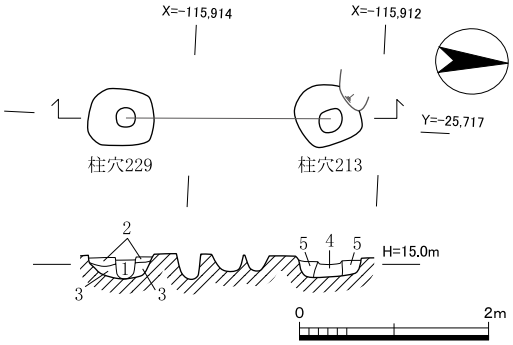
1 10YR5/2暗灰黄色シルト～微砂
2 10YR5/1褐灰色シルト 粘質
3 10YR6/2灰黄褐色シルト～微砂 固く締まる
4 10YR5/2灰黄褐色シルト～微砂 固く締まる
5 10YR5/1褐灰色シルト～微砂 土器片少量混
6 10YR5/2灰黄褐色シルト 粘質
7 10YR5/2暗灰黄色シルト～微砂
8 10YR5/2暗灰黄色シルト 粘質
9 10YR5/1褐灰色シルト～微砂 固く締まる
10 10YR5/1褐灰色シルト 粘質
11 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～微砂 粘質
12 10YR4/2暗灰黄色シルト 粘質
13 10YR5/2灰黄褐色シルト～微砂 固く締まる
14 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 固く締まる
15 10YR5/1褐灰色シルト～微砂 固く締まる 炭少量混
16 10YR6/2灰黄褐色シルト 固く締まる 土器片・炭少量混
17 10YR5/2暗灰黄色細砂 固く締まる

図11 建物１実測図（１：80）

深さは0.08～0.35ｍある。

出土遺物が乏しく、建物の明確な時期は不明であるが、柱穴の掘形の形状や、後述する鎌倉時代や室町時代の遺構との重複関係から、長岡京期から鎌倉時代以前の建物と考えられる。周辺調査でみつかった長岡京期の遺構と比べ方位の振れが大きいことや、今回の調査で平安時代中期の柱穴37を検出していることから、建物１も平安時代の遺構である可能性が高いと考えた。

柱列１（図12、図版２） 建物１の東側、調査区南東で検出した柱列である。南北１間分を検



1 10YR5/2灰黄褐色シルト～微砂 固く締まる
土器片少量混 φ3cm程度の礫少量混
2 10YR4/3にぶい黄褐色微砂～細砂 φ1～3cmの礫中量混
3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 固く締まる
4 10YR4/2灰黄褐色シルト 土器片・炭少量混
5 10YR5/3にぶい黄褐色シルト φ1cm程度の礫少量混

図12 柱列１実測図（１：80）

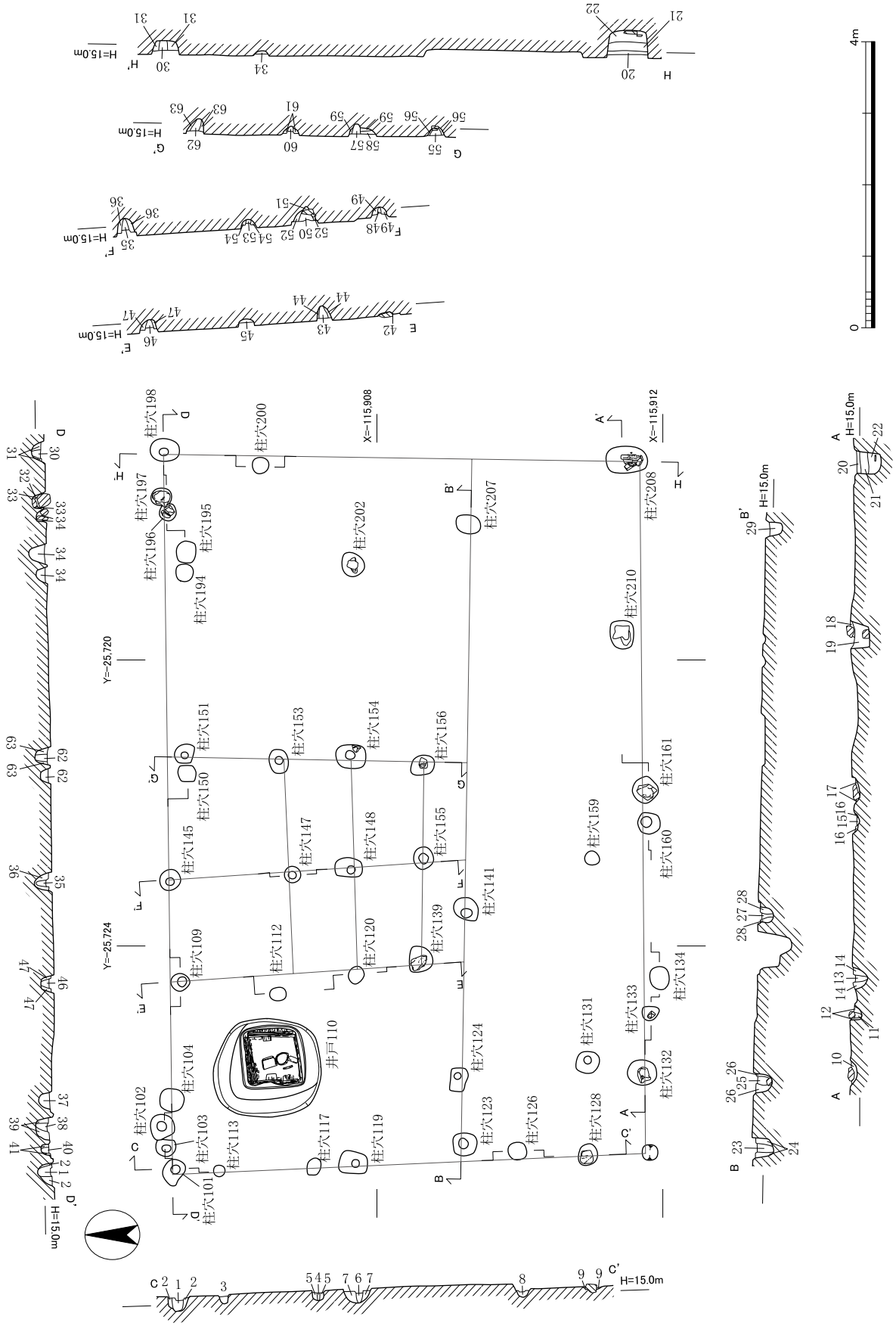


図13　建物２実測図（１：80）

1 2.5Y4/2暗灰黄色微砂 固く締まる
2 10YR3/3暗褐色シルト 粘質
3 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～微砂 粘質
4 2.5Y5/3黄褐色細砂 粘質
5 10YR4/4褐色シルト 粘質
6 10YR3/2黒褐色シルト～微砂
7 10YR5/1褐灰色シルト
8 2.5Y5/3黄褐色シルト
9 2.5Y4/2暗灰黄色シルト 粘質
10 2.5Y5/3黄褐色微砂～シルト
11 2.5Y5/1黄灰色微砂 固く締まる
12 10YR7/2にぶい黄橙色細砂
13 10YR6/3にぶい黄橙色シルト
14 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
15 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 固く締まる
16 2.5Y5/1黄灰色シルト
17 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 固く締まる
18 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘質
19 10YR6/1褐灰色シルト～微砂
20 2.5Y6/3にぶい黄色シルト 粘質
21 10YR6/1褐灰色シルト～微砂
22 2.5Y6/2灰黄色シルト
23 2.5Y6/3にぶい黄色微砂
24 2.5Y6/2灰黄色微砂
25 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～微砂
26 10YR6/1褐灰色シルト～微砂 炭少量混
27 10YR5/3にぶい黄褐色シルト～微砂
28 10YR4/1褐灰色シルト 土器片・炭少量混
29 2.5Y5/3黄褐色微砂 粘質
30 2.5Y5/1黄灰色微砂
31 10YR5/1褐灰色シルト 土器片少量混
32 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～微砂 土器片少量混
33 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
34 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～微砂 粘質
35 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～微砂 固く締まる
36 2.5Y4/1黄灰シルト 粘質
37 10YR6/1褐灰色微砂
38 2.5YR6/2灰黄色シルト 粘質
39 10YR5/1褐灰色シルト 粘質
40 2.5Y6/2灰黄色シルト 粘質
41 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘質
42 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘質
43 2.5Y4/1黄灰色シルト～微砂
44 2.5Y6/2灰黄色シルト～微砂
45 2.5Y3/2黒褐色シルト～微砂 固く締まる
46 2.5Y5/2暗灰黄色微砂
47 2.5Y5/3黄褐色微砂～細砂
48 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂 粘質
49 2.5Y5/2暗灰黄色微砂～細砂
50 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂 土器片・炭少量混
51 10YR6/1褐色灰シルト 粘質
52 10YR5/2灰黄褐色微砂 粘質
53 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～微砂 固く締まる
54 2.5Y5/1黄灰色微砂 固く締まる
55 10YR6/1褐灰色シルト～細砂
56 10YR5/2灰黄褐色細砂
57 10YR4/3にぶい黄褐色細砂～中砂
58 2.5Y6/2灰黄色シルト 固く締まる
59 2.5Y3/3暗オリーブ褐色微砂～細砂 固く締まる
60 2.5Y5/2暗灰黄色細砂～中砂
61 10YR4/4褐色微砂～細砂
62 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 固く締まる
63 2.5Y4/1黄灰色シルト 粘質 固く締まる

図13 建物２実測図（土層名）

出した。調査区外の東と南に展開し、建物となる可能性がある。柱間は2.2ｍ、柱穴の掘形は一辺0.6～0.7ｍの隅丸方形で、深さは0.18～0.26ｍある。柱痕跡の径は0.2～0.28ｍある。方位は北に対して西へ約３度振れる。遺物は出土しなかったが、柱掘形の平面形や方位の振れ、埋土が建物１の柱穴と類似することから、同時期の遺構と考えられる。

柱穴37 調査区北西で検出した柱穴である。東西約0.4ｍ、南北約0.5ｍの楕円形で、深さは0.18ｍある。埋土から平安時代中期の黒色土器が出土した。

鎌倉時代（図10、図版２）

建物２（図13） 調査区の中央やや南東寄りで検出した建物である。建物規模は、東西約10ｍ×南北約6.6ｍで、方位は北に対し西へ約２度振れる。建物を構成する柱穴の掘形は長径0.3ｍ程度の円形や楕円形のものが多いが、長径0.15～0.2ｍの小さいものもある。深さは0.05～0.4ｍある。柱痕跡の径は、0.04～0.16ｍある。柱を据えるための地下式礎石や礎板、瓦が残る柱穴もある。

建物北半の中央部分では束柱とみられる柱穴の並びがあることから、この部分は床張りであったと考えられる。また、建物内北東では同時期の井戸111が検出されており、屋内に井戸を持つ建物と考えられる。

柵１（図14） 調査区南側で検出した掘立柱の柱列である。東西３間分を検出した。柱間は2.0～2.8ｍと不均等である。方位は西に対して北へ約２度振れる。柱穴の掘形は長径0.2～0.4ｍの隅丸方形や円形で、深さは0.05～0.15ｍある。柵２とほぼ並行する。建物２に伴う区画の柵の一部と考えられる。

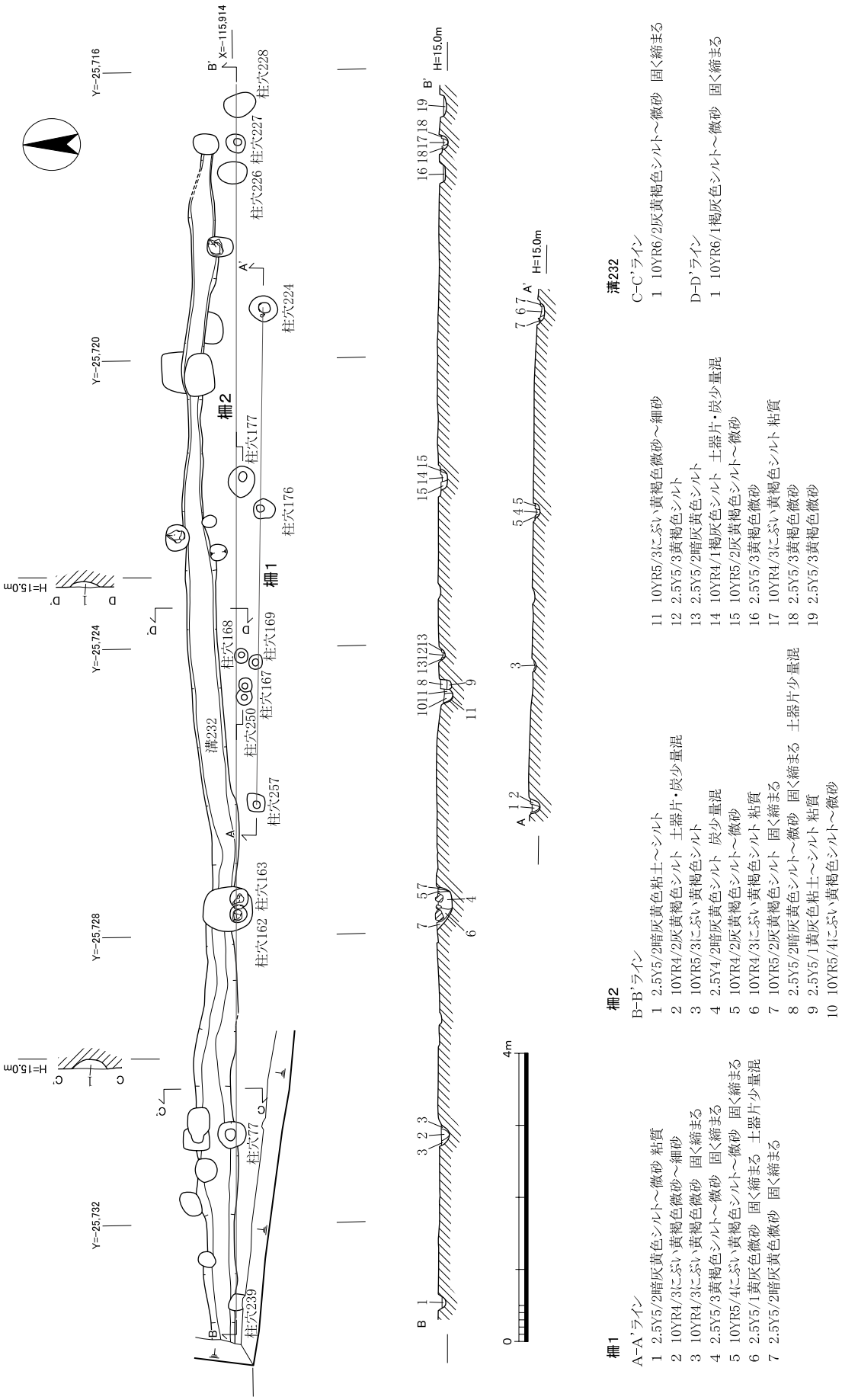


図14　柵１・２、溝232実測図（１：80）

柵２（図14）　調査区南側で検出した掘立柱の柱列である。東西５間分を検出した。柱間は2.4～4.0ｍと不均等である。方位は西に対して北へ約１度振れる。柱穴の掘形は長径0.2～0.4ｍの円形や楕円形で、深さは0.1～0.2ｍある。柵１とほぼ並行する。東端、西端ともに調査区外に延びる。溝232との重複関係から、溝232の後に、建物と南側を区画するためにつくられた柵と考えられる。

溝232（図14）　調査区南側で検出した東西方向の溝である。検出長は約16.5ｍあり、幅0.15～0.5ｍ、深さ0.08～0.1ｍで、断面は浅い皿形である。西側は調査区外へ延び、東側は調査区南東部で消失するが、本来さらに東へ延長していたと考えられる。遺物は出土しなかったが、傾きが建物２とほぼ平行であることから建物２に伴う区画溝であったと考えられる。

井戸111（図15、図版３）　調査区中央で検出した方形縦板横桟組の井戸である。掘形は、約1.0ｍ×1.3ｍのいびつな長方形で、井戸枠は一辺が約0.75ｍの方形である。深さは検出面から1.3ｍある。井戸枠は、ヒノキ材とスギ材で構成される。井戸底から曲物が２点出土した。建物２の北西部

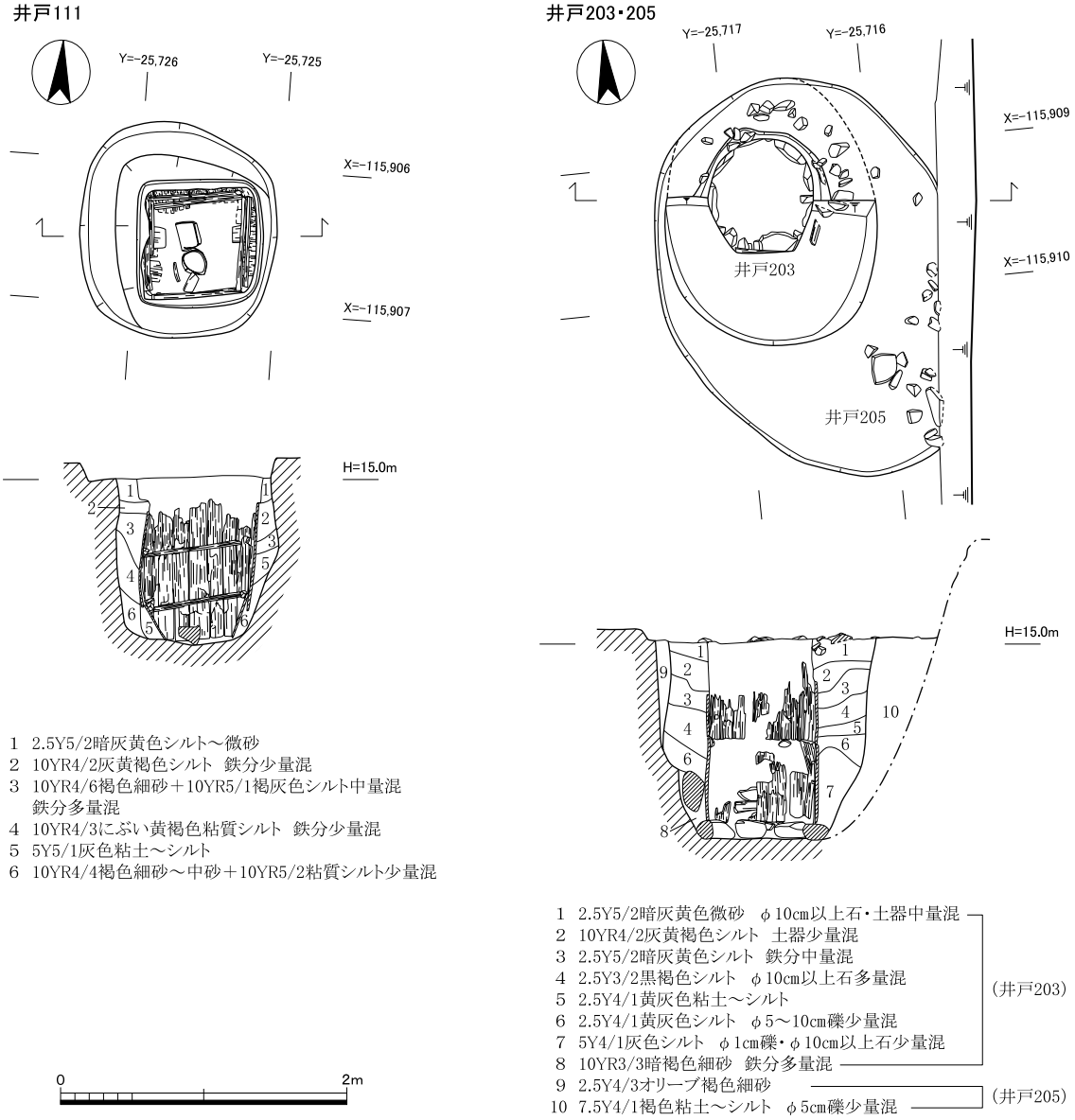


図15　井戸111・203・205実測図（１：50）

に位置し、建物屋内に作られた井戸と考えられる。

井戸205（図15）　調査区南東で検出した井戸である。井戸枠にあたるとみられる場所に、井戸203が重複しており、井戸枠は失われたと考えられる。ただし、井戸203の掘形掘削中に、長さ1.2ｍ×幅約0.2ｍの板が出土しており、井戸205は木組の井戸であった可能性が考えられる。板の樹種はモミ属であった。掘形は約３ｍ×２ｍの楕円形を呈する。南東部は調査区外となる。

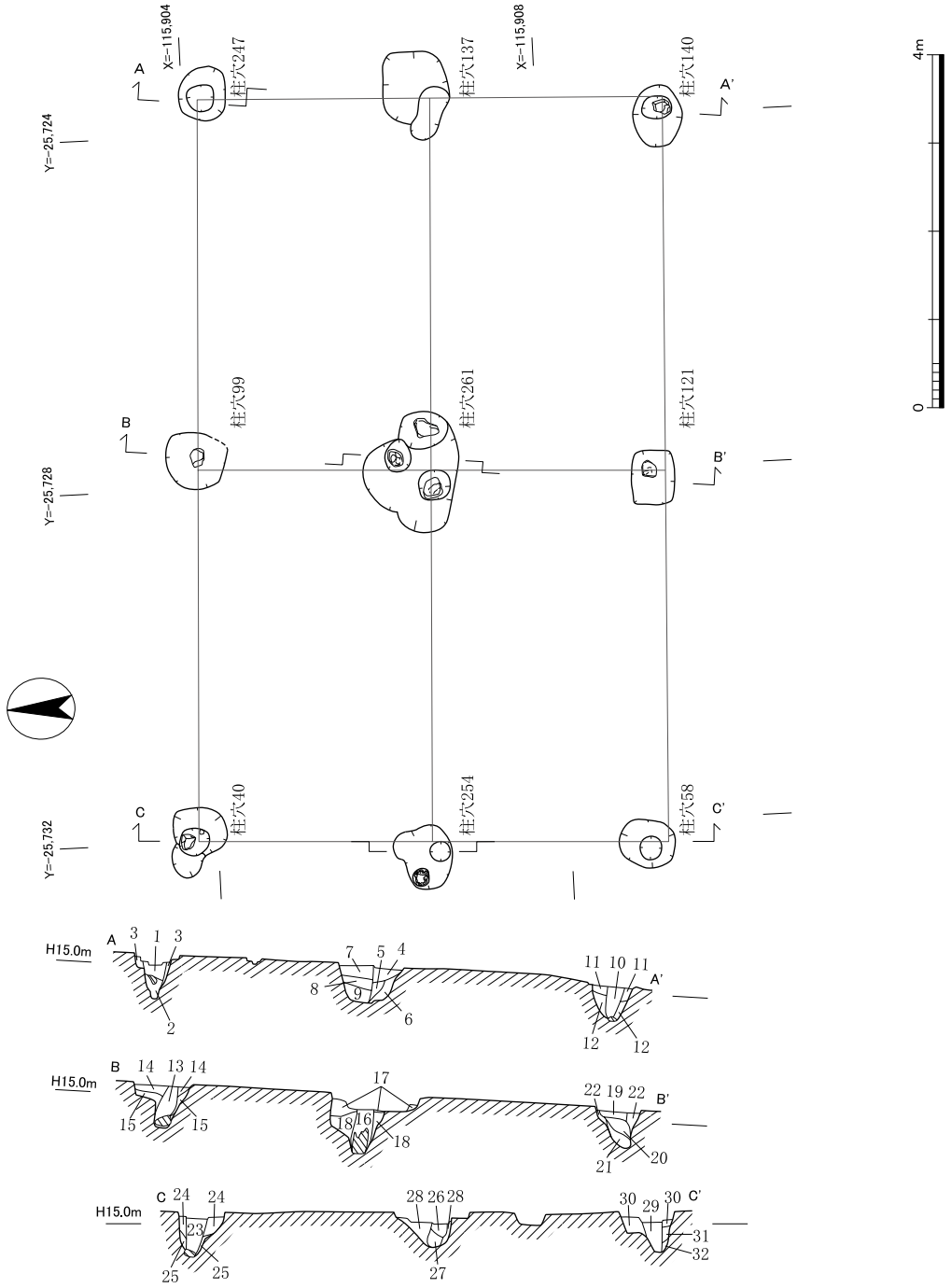
室町時代（図10）

建物３（図16、図版３）　調査区中央やや西寄りに位置する東西２間×南北２間の総柱建物である。建物規模は、東西の柱間約４ｍ、南北の柱間約2.5ｍである。建物の方位は北に対し東へ約３度東に振れる。柱穴の掘形は、一辺0.5～1.0ｍの不定形で、深さは0.4～0.7ｍある。柱痕跡の径は、0.18～0.22ｍある。柱穴40・99・121・140・247からは、地下式礎石や地下式礎石に利用されたと考えられる石がみつかっている。柱穴261・254では柱根が残っていた。樹種はクリ材である。柱穴254では、遺構検出時に柱痕跡を確認しているが、柱穴の掘形完掘時にその北西部で柱根を検出したことから、柱の建て替えが行われたことがわかる。

柵３（図17）　調査区南東で検出した東西方向の柱列である。東西４間分を検出した。柱間は1.4～2.0ｍと不均等。柱掘形は長径0.5～0.8ｍの楕円形や不定形で、深さは0.1～0.5ｍある。方位は西に対して北へ約７度振れる。すべての柱穴から地下式礎石を検出した。柱穴231は、地下式礎石の上に据えられた柱根が残っていた。樹種はクリ材である。柵の東端が調査区外へ延びるかは不明。建物３の南東側に設けられた区画の柵と考えられる。

柵４（図17）　調査区北側で検出した東西方向の柱列である。東西５間分を検出した。柱間は0.6～1.7ｍと不均等。柱掘形は長径0.25～0.45ｍの円形や楕円形で、深さは0.1～0.3ｍある。東端・西端ともに調査区外へ延長するとみられる。遺物は出土しなかったが、傾きが建物３とほぼ同じであることから、建物３に伴う区画の柵である可能性が高い。

井戸203（図15、図版３）　調査区南東で検出した円形縦板組の井戸である。掘形は長径約1.8ｍの楕円形で、井戸枠は直径約0.75ｍの円形である。深さは検出面から約1.5ｍ。木枠は、ヒノキ材とスギ材で構成される。井戸底には長径0.25～0.35ｍの石が円形に並べられており、石の上に縦板を組んで円形の井戸枠をつくる。井戸枠内には、長径0.2ｍ以上の石が大量に詰まっており、井戸を埋める際に投棄されたとみられる。埋土から16世紀の遺物が出土した。井戸205と重複しており、遺物には13～14世紀のものも混入することから、井戸205廃絶後に、掘りなおして井戸203をつくったと考えられる。



1 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂　土器片・炭多量混
2 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘質　土器片・炭多量混
3 2.5Y5/2暗灰黄色シルト　固く締まる
4 2.5Y4/2暗灰黄色微砂　土器片・炭多量混
5 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂　土器片・炭中量混
6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト　土器片・炭中量混
7 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～微砂　固く締まる　土器片・炭多量混
8 2.5Y4/4オリーブ褐色微砂～細砂＋10YR4/2灰黄褐色シルト中量混
固く締まる　土器片・炭中量混
9 2.5Y5/2暗灰黄色シルト＋10YR4/2灰黄色褐色シルト多量混
土器片・炭少量混
10 2.5Y4/2暗灰黄色微砂　土器片・炭多量混
11 2.5Y4/4オリーブ褐色微砂～細砂＋10YR5/2灰黄褐色粘土中量混
土器片・炭多量混
12 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘質　土器片少量混
13 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～微砂　φ1cm程度の礫中量混
土器片少量混
14 2.5Y5/2暗灰黄色微砂　固く締まる
15 2.5Y5/2暗灰黄色シルト　固く締まる　土器片・炭少量混
16 2.4Y4/2暗灰黄色粘土～シルト 粘質
17 10YR4/3にぶい黄褐色微砂　固く締まる　土器片・炭中量混
18 10YR5/1褐灰色粘土～シルト＋10YR5/3にぶい黄褐色粘土少量混
土器片・炭中量混
19 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～微砂　固く締まる　土器片・炭多量混
20 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂 粘質　土器片・炭多量混
21 2.5Y5/1黄灰色粘土～シルト 粘質　土器片・炭多量混
22 2.5Y4/1黄灰色シルト～微砂　固く締まる　土器片・炭多量混
23 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～微砂　土器片多量混
24 2.5Y4/2暗灰黄色シルト＋2.5Y4/3オリーブ褐色シルト少量混
25 10YR4/2灰黄褐色シルト 粘質
26 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂　固く締まる　炭少量混
27 10YR5/4にぶい黄褐色シルト＋10YR5/1褐灰色シルト少量混
土器片・炭少量混
28 2.5Y5/2暗灰黄色シルト　土器片・炭多量混
29 2.5Y5/2暗灰黄色微砂　炭多量混
30 2.5Y5/1黄灰色シルト～微砂　土器片・炭多量混
31 2.5Y4/1黄灰色微砂
32 2.5Y5/1黄色灰色粘土～シルト

図16　建物３実測図（１：80）

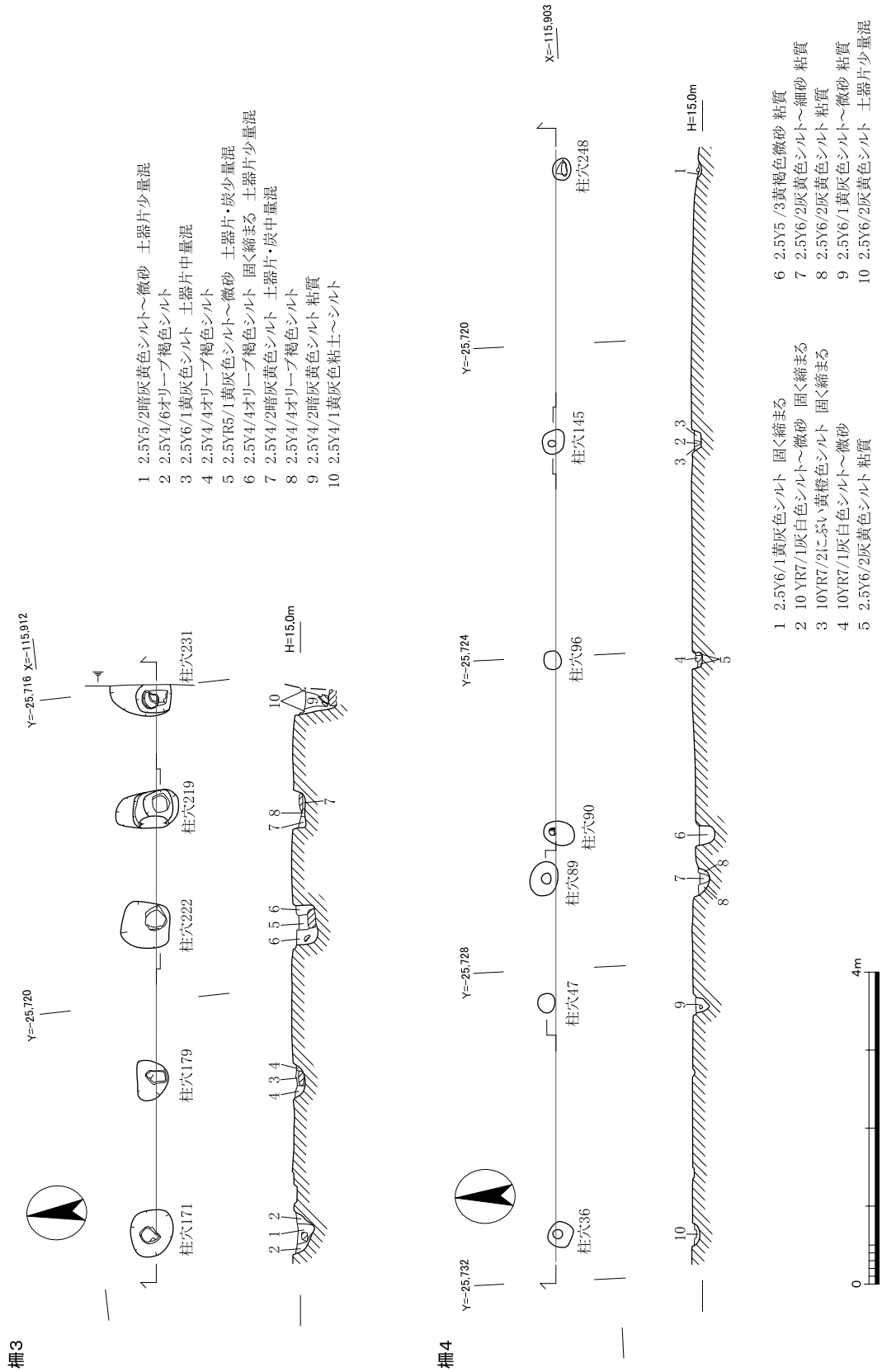


図17　柵3・4実測図（1：80）

４．遺　　物

（１）出土遺物の概要

調査では、整理コンテナにして26箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、石製品、木製品がある。全体の約７割を弥生土器が占める。遺物の帰属時期は、弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代、鎌倉時代、室町時代である（表３）。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について概要を述べる。なお、遺物の個別の詳細については巻末の付表１・２にまとめた。

（２）土器類

１）弥生時代後期から古墳時代前期の土器（図版４～６）

方形周溝墓233出土土器（図18、図版５）　１～９は周溝から出土した弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器である。遺物はほとんどが周溝の上層から出土したものである。破片が多く、図化できた遺物は少ない。１は受口状口縁の甕である。口縁部下端には列点文をめぐらす。外面はハケのち頸部から体部最大径部分にかけて加飾する。近江系の甕だが、在地の胎土を使い製作されたとみられる。２は布留式の甕である。全体的に磨滅するが、口縁部は横ナデ調整である。周溝出土土器の中において新しい時期のもので、混入遺物の可能性も考えられる。３は甕の底部である。粘土紐接合痕がみられる。４は台付鉢の台部である。外面はハケ、内面はナデを施す。５・６は高杯の杯部である。５は皿形の杯部で、外面に縦方向のミガキを施す。６は全体的に磨滅するが、内面の一部にハケが残る。底部が中央につれて厚くなるため、杯部の下半とみられるが、甕の底部の可能性も考えられる。７～９は高杯の脚部である。縦方向にミガキを施す。７は中実、８・９は中空で絞り目が確認でき、円形透かしを３方に開ける。９は透かしの下に直線文が２条分確認できる。

表３　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
弥生時代後期～古墳時代前期	弥生土器、布留式土器、石製品		弥生土器66点、布留式土器１点、石製品１点		
平安時代	黒色土器		黒色土器１点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、木製品		土師器２点、瓦器７点、木製品２点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、木製品		土師器２点、瓦器１点、焼締陶器１点、輸入磁器４点、瓦類１点、石製品１点、木製品１点		
合　計		37箱	91点（11箱）	０箱	26箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

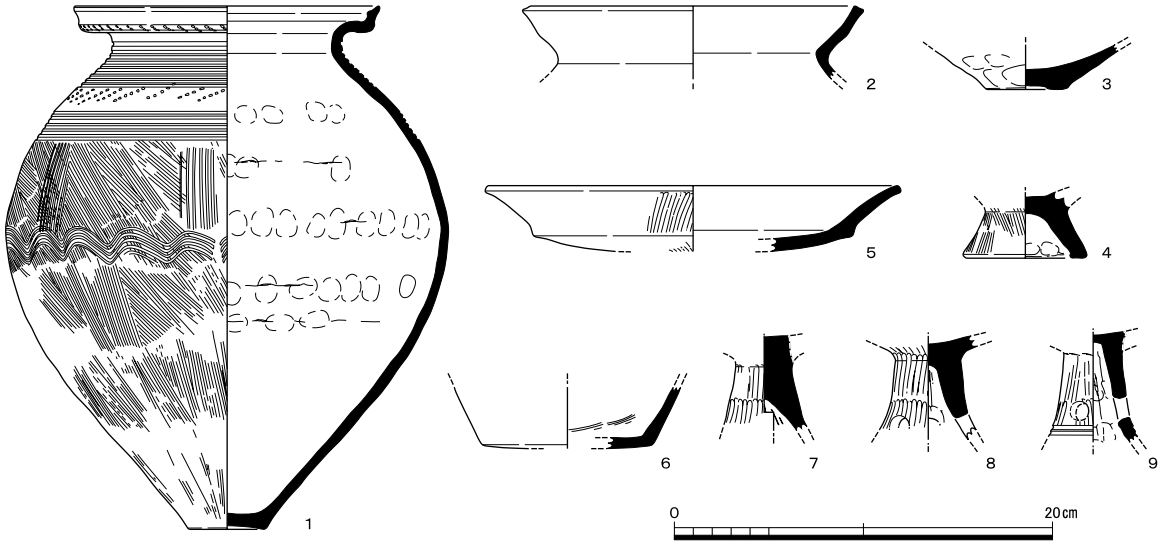


図18　方形周溝墓233出土土器実測図（１：４）

溝234出土土器（図19・20、図版４～６）　溝234からは弥生時代後期後葉の弥生土器が多量に出土した。完形に近いものもある。

10～14は広口壷である。10・11は受口状口縁の壷である。10は全体的に磨滅するが、口縁部に列点文がみられる。12・13の口縁端部は垂下する。12の口縁端部には２条の直線文を施したのち竹管文を押す。肩部外面に４条の櫛描直線文、列点文、５条の櫛描直線文を施す。13は全体が磨滅する。口縁端部には２条の凹線がめぐる。14は頸部からゆるやかに外反する口縁で、端部がやや垂下する。15～20は短頸壷である。15は口縁が斜め上方に立ち上がりやや外反する。16は口縁が内湾して立ち上がる。口縁部外面には４条のヘラ描直線文を施し、体部はタタキのちハケを施す。17・18は口頸部がやや斜めに直線的に立ち上がる。17は体部外面最大径部分に櫛描波状文がわずかに残る。頸部から底部まで黒斑がつく。18は全体的に磨滅するが、外面の体部下半に黒斑がつく。19は外反して立ち上がる口縁部で、外面の一部にハケが残る。20は小型の壷で、外面は磨滅するが、上半の一部に黒斑がつく。21・22は細頸壷である。21は脚付の壷で、頸部と脚部外面に縦方向、体部に横方向のミガキを施す。頸部内面にも縦方向のミガキを施す。脚部は円形透かしを３方開け、屈曲して開く高杯脚部に類似する。22は頸部である。垂直に立ち上がり、外反する。外面は縦方向のミガキを施し、口縁端部には１条の沈線がめぐる。23は無頸壷である。底部は焼成前に内側から穿孔する。外面は磨滅するが一部に波状文が残る。

24・25は、「く」の字状口縁の甕である。24は口縁部外面にハケのちナデ調整を施す。25は口縁部から肩部外面にハケ、体部にはタタキを施す。26～38は受口状口縁の甕である。26は口縁端部の立ち上がりがゆるやか。肩部外面は５条の櫛描直線文と列点文がめぐる。27～38は口縁端部に列点文がめぐる。頸部から肩部外面にはハケのち３～８条の櫛描直線文や列点文などを加飾する。31・32は口縁端部が外反する。27・34・38は胎土の芯が黒く近江南部からの搬入品とみられる。また、36・37は近江系甕だが、在地の胎土でつくられている。37は口縁端部がやや外反し、横ナ

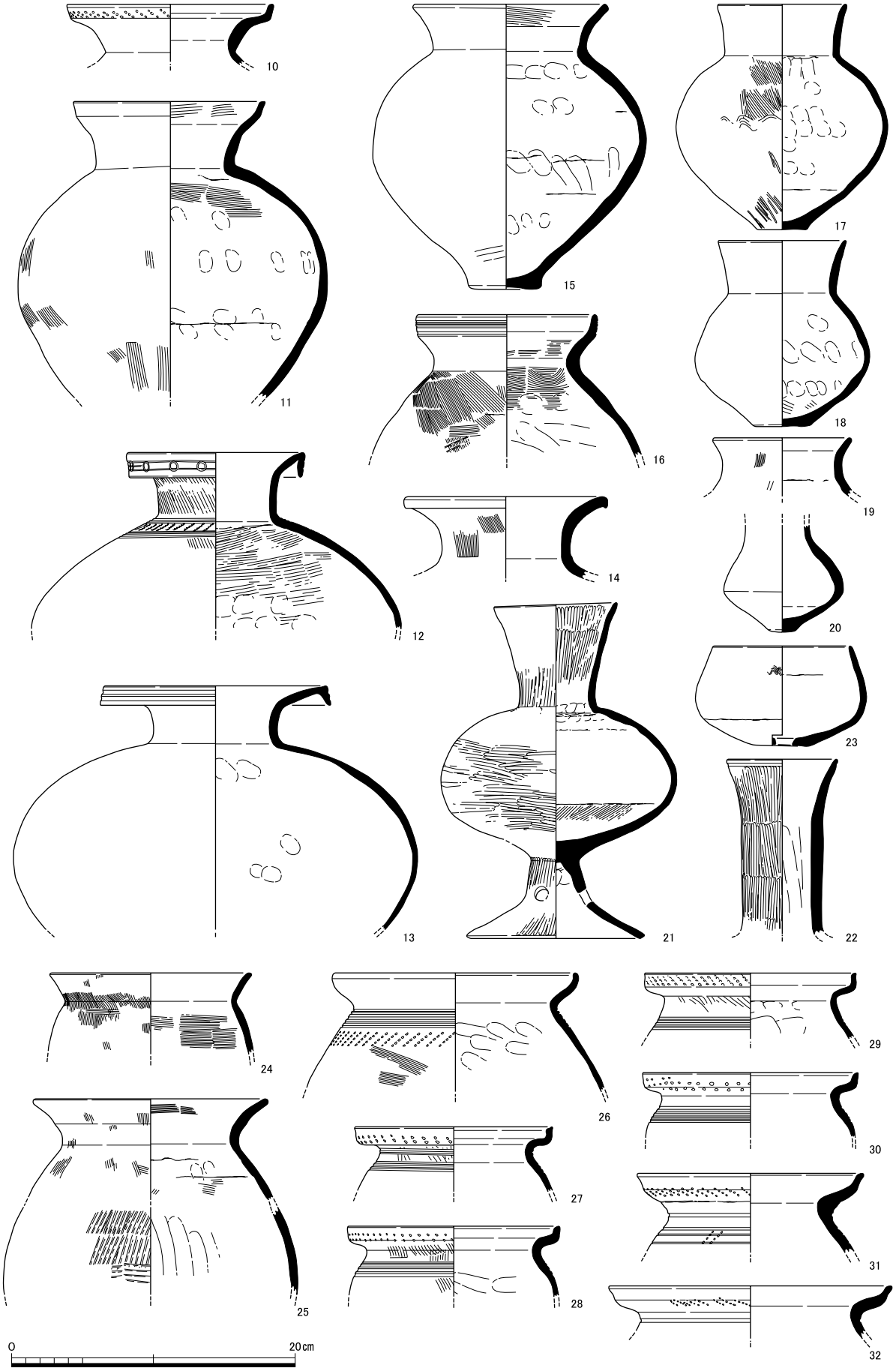


図19　溝234出土土器実測図１（１：４）

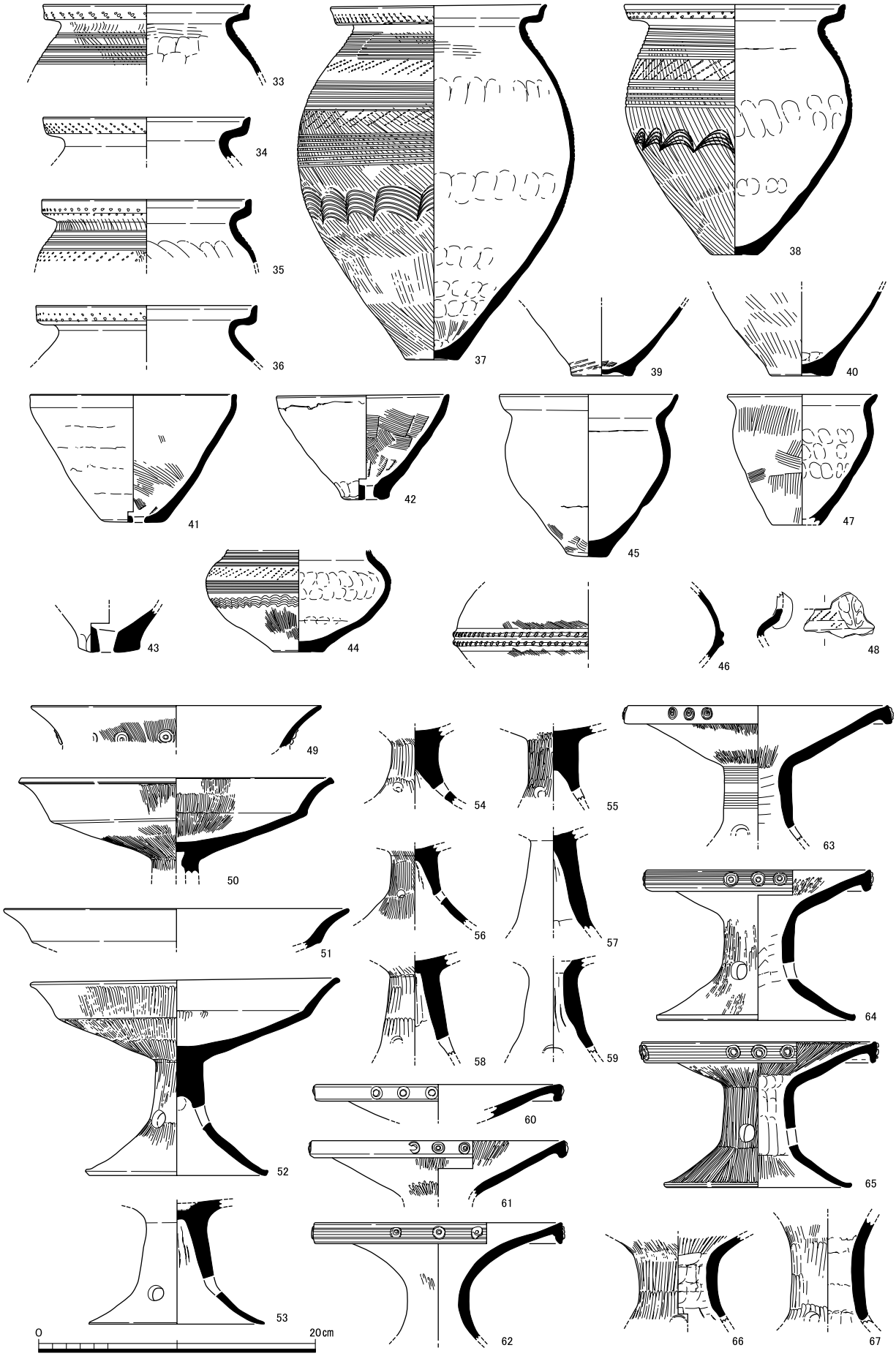


図20　溝234出土土器実測図２（１：４）

デのち列点文を入れる。頸部から体部外面にハケのち加飾する。38は口縁端部がやや外反して、ナデのち一条の沈線と列点文を施す。頸部から体部外面にハケのち加飾する。全体に煤が付着する。39・40は底部である。39は底部外面にタタキ、内面にハケを施す。40は外面にハケ、底部内面にオサエが残る。

41～43は有孔鉢で、底部は焼成前に内側から穿孔する。41は口縁部が直立し、ナデ調整。体部外面は磨滅するが、内面にハケが残る。42は外面が磨滅するが一部ハケが残る。底部内面には工具痕がみられ板ナデを施す。44～46は受口状口縁の鉢である。44は口縁部が欠損し、肩部から体部外面にナデのち加飾する。45は全体が磨滅するが一部外面にハケが残る。口縁と内面はナデで仕上げる。46は体部外面最大径部分に貼付突帯を２条めぐらせ、刻み目を入れる。手焙形土器である可能性も考えられる。47は「く」の字状口縁の鉢である。48は手焙形土器の耳部である。鉢部の口縁はナデで仕上げ、端部に列点文を施す。

49～59は高杯である。49は外面に縦方向のハケを施し、円形浮文を貼り付ける。杯部口縁とみられるが、壷の口縁である可能性も考えられる。50は内外面に縦方向のミガキを施す。脚部にもミガキが続く。51は内外面にミガキがわずかに残る。52は杯部と脚部外面に縦方向のミガキを施す。杯部内面にも一部ミガキが残る。脚部はゆるやかに開き、円形透かしを３方に開ける。53～59は脚部である。53は裾部がやや屈曲して開き、屈曲部には円形透かしを３方に開ける。全体的に磨滅するが、内面に絞り目が確認できる。54・55は中実、53・56・57は中空で絞り目が確認できる。58・59は円板充填技法の脚部。絞り目が確認できる。54～56・58は外面に縦方向のミガキを施し、円形透かしを３方に開ける。59は透かしが３箇所分確認できるが、４方に開いていたとみられる。

60～67は器台である。60～65は受部端部が垂下して円形浮文を貼り付ける。また、63～67は筒部から裾部の屈曲部付近に円形透かしを開ける。63～65・67は３方に開け、66は一箇所のみ確認できた。61は内外面に縦方向のミガキが残る。62は全体的に磨滅するが、外面の一部にミガキが残る。63は受部外面に縦方向のミガキを施し、筒部に７条の櫛描直線文を２単位めぐらせる。受部内面は縦方向のミガキが一部残る。64は外面が全体的に磨滅するが、筒部に縦方向のミガキが残る。受部内面に縦方向のミガキ、筒部が横方向のケズリ、裾部にナデを施す。65は外面全体に縦方向のミガキを施す。受部内面に縦方向のミガキ、筒部はナデを施す。66・67は筒部である。外面に縦方向のミガキを施す。66の裾部には工具痕がみられ板ナデを施したとみられる。

２）平安時代の土器（図21、図版６）

柱穴37出土土器　68は内外面が黒い黒色土器Ｂ類の椀である。貼付高台をもち、外面はケズリのちヘラミガキを施す。内面は磨滅して調整不明瞭。

３）鎌倉時代の土器（図21、図版６）

柵１ 柱穴224出土土器　69・70は土師器の皿である。外面体部にはオサエが残り、口縁部は横ナデで仕上げ、底部内面はナデを施す。在地産。12世紀末から13世紀。

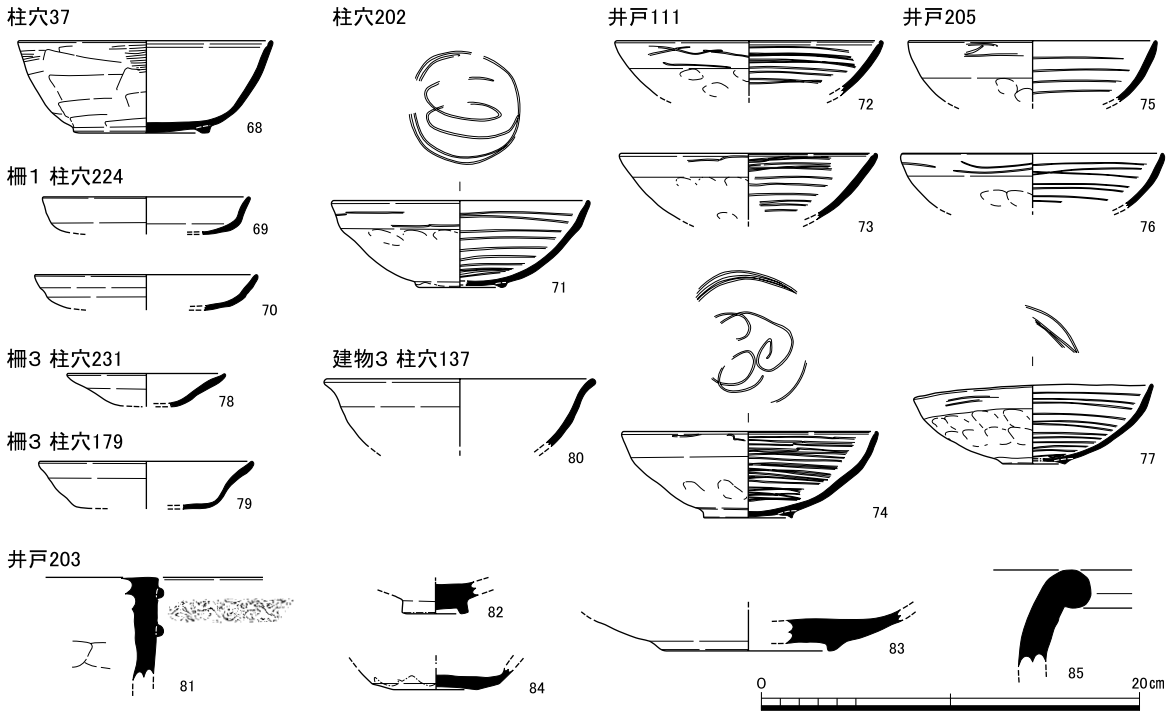


図21　第２期遺構出土土器実測図（１：４）

柱穴202出土土器　71は瓦器椀である。外面の口縁部にはわずかにヘラミガキがみられる。13世紀前半。

井戸111出土土器　72～74は瓦器椀である。口縁部外面にはわずかにヘラミガキがみられる。内面の口縁端部付近に沈線がめぐる。13世紀初め。

井戸205出土土器　75～77は瓦器椀である。口縁部外面にはわずかにヘラミガキがみられる。内面のミガキの間隔も大きい。13世紀前半。

４）室町時代の土器（図21）

柵３ 柱穴231出土土器　78は土師器の小型皿である。在地産。15世紀後半。

柵３ 柱穴179出土土器　79は土師器の皿である。外面は体部から底部にかけてオサエが残る。在地産。15世紀後半。

建物３ 柱穴137出土土器　80は輸入陶磁器の白磁椀である。端反り椀。

井戸203出土土器　81は奈良火鉢の浅鉢とみられる。外面に貼付突帯を２条めぐらせ、その間に文様を押捺する。82～84は輸入陶磁器である。82・83は青磁である。82は椀の底部で、削り出し高台。内外面に施釉するが、高台内部と畳付は無施釉。83は杯の底部で削り出し高台。内外面に施釉し、高台内の中央部が無施釉。84は白磁皿の底部。底部外面はケズリ。内外面に施釉するが、外面底部は無施釉である。85は備前産の焼締陶器で甕の口縁である。口縁部の玉縁は球状になる。

（３）瓦類（図22）

井戸203から、平瓦が１点出土した。凸面の格子状タタキ目と凹面の布目が明瞭に残る。

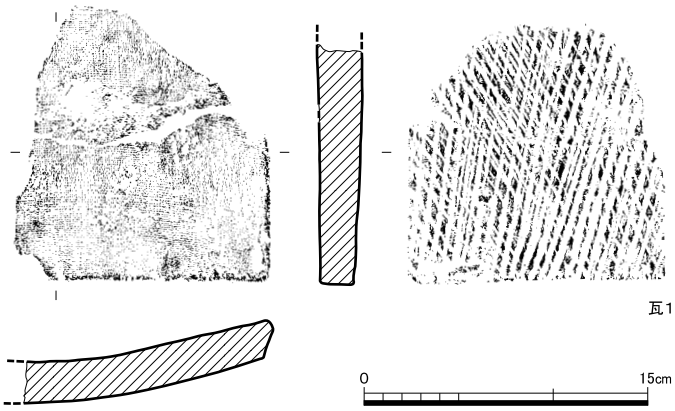


図22　出土瓦拓影及び実測図（１：４）

（４）石製品（図23）

石１は石器の剥片である。二上山産のサヌカイトとみられる。埋土で、中世の遺構として判断して調査した柱穴106から出土した。遺構の底面に突き刺さった状況で出土した。意図的に埋めた可能性が考えられる。

石２は井戸203から出土した砥石である。両端が欠損する。表裏、両側の４面とも滑らかで磨滅している。石材は灰白色の凝灰岩。

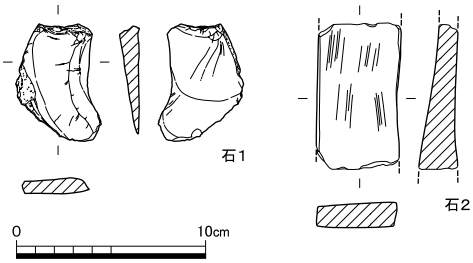


図23　出土石製品実測図（１：４）

（５）木製品（図24）

木１・２は井戸111から出土した曲物である。木１は幅15.5㎝、厚さ0.35㎝の薄板を曲げて樺紐で綴じ、厚さ0.7㎝の楕円形の底板に取り付ける。木２は幅９㎝、厚さ0.25㎝の薄板を曲げて樺紐で綴じ、厚さ0.8㎝の底板に木釘で打ち付けて取り付ける。

木３は井戸203から出土した曲物の底板である。厚さ0.9㎝あり、半分以上が欠損する。

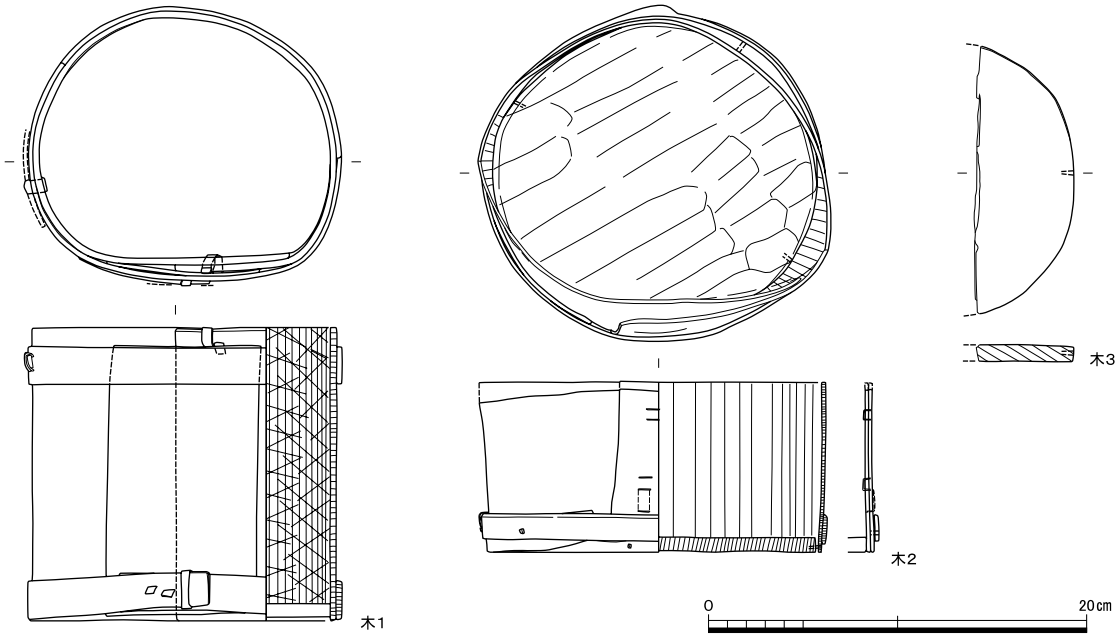


図24　出土木製品実測図（１：４）

参考文献

森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社　1990

吹田直子「山城地域」『古式土師器の年代学』㈶大阪府文化財センター　2006

『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書第33冊　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　2003

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996

中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

５．まとめ（図25・26）

今回の調査では、基盤層(地山)上面で弥生時代後期から室町時代までの４時期の遺構を検出し、調査地の歴史的変遷を明らかにすることができた（図25）。

弥生時代後期後葉から古墳時代前期の遺構としては、方形周溝墓233と溝234を検出した。方形周溝墓233については、弥生時代後期後葉から古墳時代前期の土器が出土したが、その大半が上層から出土しており、土器は周溝が検出面まで埋没した時期を示すと考えられる。このことから、造墓の時期については多少遡る可能性が考えられる。1997～1999年調査と2012～2013年調査では、方形周溝墓233の南東部で弥生時代後期の大型竪穴建物SH４がみつかっている（図26）。方形周溝墓233と大型竪穴建物SH４は非常に近い場所にあり、重複関係にある可能性が考えられるが、大型竪穴建物SH４からの出土遺物が乏しく、２つの遺構の時期差については現時点で明確にすることができない。また、今回検出した方形周溝墓233は、一辺約15ｍ、溝の深さが検出面から最大0.8ｍと、京都盆地の方形周溝墓としては規模が大きい。これは、被葬者の階層性が規模に反映されて墓が大型化していく、弥生時代後期の特徴が表れているものと考えられる。ただし、調査地付近では、南側では大型竪穴建物SH４、独立棟持柱付の大型掘立柱建物SB001・掘立柱建物50、東側では工房と考えられている竪穴建物104がみつかっている。このことから、弥生時代後期の調査地付近一帯は居住域と異なる性格の場所として土地利用されていた可能性が考えられ、今回みつかった方形周溝墓233が大型であることが、何らかの特殊性を示している可能性も否定できない。溝234からは多量の弥生時代後期後葉の土器が出土した。1997～1999年調査でみつかった溝SD７の延長にあたり、排水溝や区画溝の可能性が考えられる。出土土器の中には近江系の甕が多くみられ、近江南部からの搬入品の土器、搬入品と製作技法は同じだが在地の土で製作したとみられる土器、そしていわゆる在地産の土器の３種類を確認した。また、1997～1999年調査で検出した方形周溝墓SX３からは吉備系とみられる搬入品の壺が後期前葉の土器とともに出土しており、西や東との交流があったことが窺える。

そして弥生時代以降、断絶しながらも何度も土地利用が行われた様子が確認できた。

平安時代と考えられる建物１、柱列１、鎌倉時代前半の建物２、柵１・２、井戸111・205、溝232、室町時代後半の建物３、柵３・４、井戸203など、今回の調査では大きく分けて３時期分の建物や柵などの遺構を検出した。また、鎌倉時代と室町時代とみられる柱穴を多数検出した。

建物１、柱列１は、方位が西へ約３～４度振れている。周辺調査でみつかった長岡京期の建物や溝などの遺構は、ほぼ正方位のものが多く、今回見つかった建物と柱列が長岡京期の遺構とは考えにくい。また今回の調査で検出した柱穴37を含め、周辺調査では数が多くないものの、平安時代の柱穴、井戸、土坑などの遺構がみつかっている。このことから、平安時代も居住域であったとみられ、今回みつかった建物と柱列が平安時代に属する遺構ではないかと考える。

鎌倉時代（13世紀前半）の遺構としては、建物２、井戸111・205、溝232、柵１・２などを検出した。建物２は屋内に井戸をもち、束柱穴の存在から床張りの空間があったとみられる。建物南部

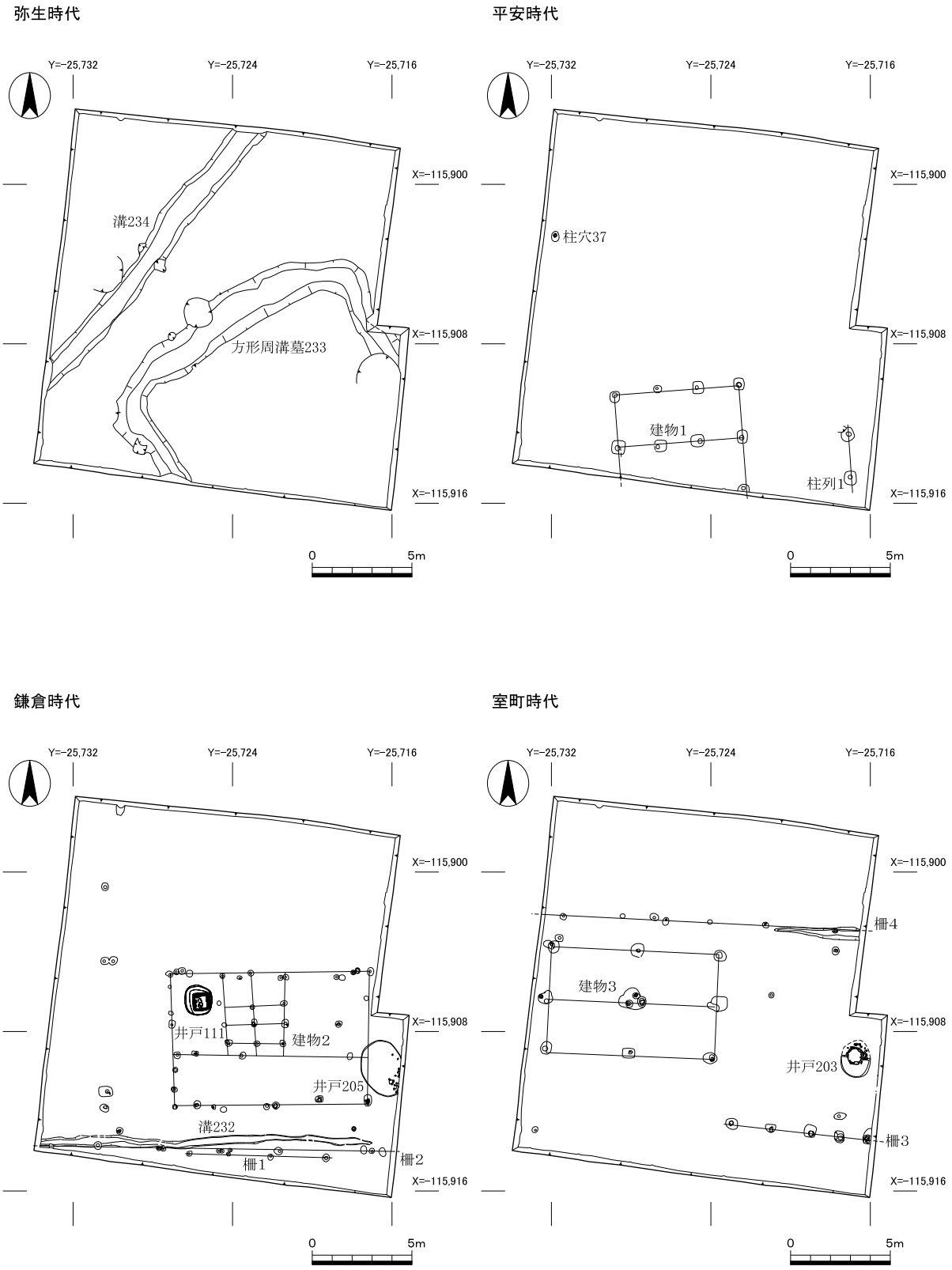


図25　遺構変遷図（1：300）

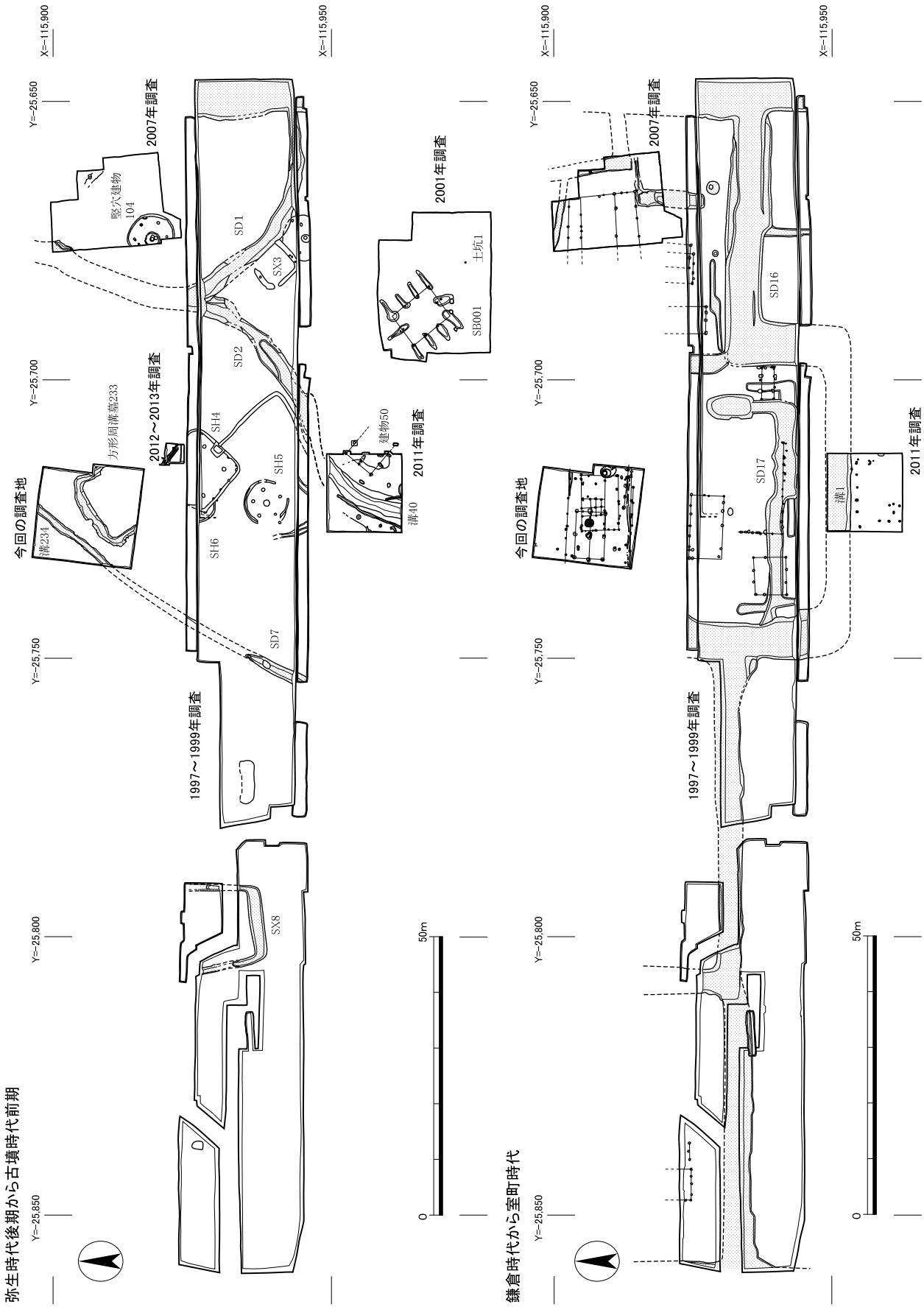


図26　周辺遺構変遷図（1：1,000）

には東西方向の柵と溝を持ち、区画施設を伴う建物であることがわかった。

室町時代（15世紀後半～16世紀初め）の遺構としては、建物３、井戸203、柵３・４などを検出した。建物３は総柱建物であり、東西柱間が約４ｍと大きいこと、柱堀形も大きく地下式礎石などが残ることから、居住の建物ではなく、倉庫や作業場、工房などの施設であった可能性が考えられる。また、建物の南北に柵をもち、鎌倉時代の建物同様、区画施設を伴う建物であることがわかった。

調査地南東では室町時代の居館の一部とみられる遺構がみつかっている（図26）。1997～1999年調査では建物と、一部南側に拡張する東西方向の堀がみつかり、2007年度調査では建物の一部とそれを囲む堀がみつかった。今回の調査地で検出した室町時代の建物や柵などは、既往の調査でみつかった建物と同じ区画内にあった居館の一部である可能性が考えられ、下久世構跡や隣接する下久世城跡などとの関連が考えられる。

弥生時代後期に旧河川沿いの微高地であることを利用して集落が築かれたこの土地では、平安時代に何らかの建物が建てられ、鎌倉時代になると溝や柵で区画施設を伴う建物が建てられた。さらに室町時代になると、再び同じ場所に同じく区画施設を伴う建物を建てたことが明らかになった。遺構の時期に開きがあり継続利用はみられないものの、桂川の西岸に立地し河川沿いである利便性が高い土地が、時代ごとに利用され続けていた様子がわかった。

付表１　土器一覧表

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色調	胎　　土
1	弥生土器	甕	方形周溝墓	16.0	27.7	3.9	5YR6/6橙	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
2	布留式土器	甕	方形周溝墓	17.2	(3.9)		5YR6/4にぶい橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
3	弥生土器	甕	方形周溝墓		(2.4)	3.9	2.5YR7/4淡赤橙	やや密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
4	弥生土器	台付鉢	方形周溝墓		(3.5)	6.1	10YR8/1灰白	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
5	弥生土器	高杯	方形周溝墓	21.6	(3.5)		10YR8/2灰白	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
6	弥生土器	高杯	方形周溝墓		(3.2)		10YR7/2にぶい黄橙	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
7	弥生土器	高杯	方形周溝墓		(4.3)		10YR4/1褐灰	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
8	弥生土器	高杯	方形周溝墓		(5.5)		7.5YR7/3にぶい橙	密（φ1.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）
9	弥生土器	高杯	方形周溝墓		(5.8)		7.5YR8/3浅黄橙	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
10	弥生土器	広口壷	溝234	14.4	(4.3)		7.5YR7/8黄橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
11	弥生土器	広口壷	溝234	13.3	(20.9)		2.5Y7/2灰黄	密（φ3.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）
12	弥生土器	広口壷	溝234	12.3	(12.4)		7.5YR7/3にぶい橙	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
13	弥生土器	広口壷	溝234	15.5	(17.2)		7.5YR7/6橙	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
14	弥生土器	広口壷	溝234	13.6	(5.8)		5YR7/6橙	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
15	弥生土器	短頸壷	溝234	12.9	20.1	5.2	7.5YR7/3にぶい橙	密（φ6.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
16	弥生土器	短頸壷	溝234	12.4	(10.1)		10YR8/1灰白	密（φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
17	弥生土器	短頸壷	溝234	9.0	15.9	3.2	2.5YR8/1灰白	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
18	弥生土器	短頸壷	溝234	9.0	14.1	4.0	7.5YR7/6橙	密（φ3.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
19	弥生土器	短頸壷	溝234	9.6	(4.1)		2.5Y7/2灰黄	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
20	弥生土器	短頸壷	溝234		(7.6)	2.0	5YR6/6橙	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
21	弥生土器	細頸壷	溝234	8.6	23.7	12.0	10YR8/2灰白	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
22	弥生土器	細頸壷	溝234	7.6	(12.3)		2.5YR7/2灰黄	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
23	弥生土器	無頸壷	溝234	10.5	7.1	3.6	7.5YR8/3浅黄橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
24	弥生土器	甕	溝234	14.2	(5.7)		10YR8/2灰白	密（φ1.5mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
25	弥生土器	甕	溝234	16.2	(7.2)		2.5Y6/2灰黄	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
26	弥生土器	甕	溝234	16.8	(8.4)		10YR6/2灰黄褐	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
27	弥生土器	甕	溝234	13.8	(4.6)		2.5YR8/2灰白	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
28	弥生土器	甕	溝234	14.7	(5.0)		10YR8/3浅黄橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
29	弥生土器	甕	溝234	14.8	(4.5)		10YR8/2灰白	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色調	胎　　土
30	弥生土器	甕	溝234	15.0	(4.6)		7.5YR8/3浅黄橙	密（φ3.5㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
31	弥生土器	甕	溝234	15.8	(5.6)		7.5YR8/3浅黄橙	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
32	弥生土器	甕	溝234	19.8	(3.7)		7.5YR8/4浅黄橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
33	弥生土器	甕	溝234	14.8	(5.1)		7.5YR8/2灰白	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
34	弥生土器	甕	溝234	12.9	(3.0)		10YR8/2灰白	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
35	弥生土器	甕	溝234	15.0	(4.6)		10YR7/2にぶい黄橙	密（φ5.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
36	弥生土器	甕	溝234	15.8	(4.1)		5YR7/6橙	密（φ2.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
37	弥生土器	甕	溝234	15.5	25.7	3.6	10YR7/2にぶい黄橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
38	弥生土器	甕	溝234	15.8	18.1	3.2	2.5YR7/3浅黄	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
39	弥生土器	甕	溝234		(5.0)	4.2	10YR8/2灰白	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
40	弥生土器	甕	溝234		(6.1)	4.2	7.5YR7/3にぶい橙	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
41	弥生土器	鉢	溝234	14.8	9.3	4.0	7.5YR6/4にぶい橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
42	弥生土器	鉢	溝234	12.3	7.6	3.2	5YR6/6橙	密（φ0.5㎜以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
43	弥生土器	鉢	溝234		(3.2)	4.3	7.5YR7/6橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
44	弥生土器	鉢	溝234		7.4	2.5	10YR6/2灰黄褐	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
45	弥生土器	鉢	溝234	12.6	11.8	2.8	2.5Y8/1灰白	密（φ3.5㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
46	弥生土器	鉢	溝234		(5.1)		10YR7/2にぶい黄橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
47	弥生土器	鉢	溝234	10.6	(9.5)		7.5YR7/4にぶい橙	密（φ1.5㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
48	弥生土器	手焙形土器	溝234		(3.3)		7.5YR8/2灰白	密（φ2.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
49	弥生土器	高杯	溝234	17.8	(3.0)		5YR7/3にぶい橙	密（φ4.0㎜以下の長石、チャート、赤色粒子を含む）
50	弥生土器	高杯	溝234	22.4	(6.9)		7.5YR7/3にぶい橙	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
51	弥生土器	高杯	溝234	24.8	(2.9)		7.5YR6/6橙	密（φ2.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
52	弥生土器	高杯	溝234	21.9	14.3	12.7	10YR8/2灰白	密（φ5.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
53	弥生土器	高杯	溝234		(9.0)	12.6	5YR6/6橙	密（φ3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
54	弥生土器	高杯	溝234		(5.5)		10YR8/2灰白	やや密（3.0㎜以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
55	弥生土器	高杯	溝234		(5.4)		10YR7/2にぶい黄橙	密（φ1.5㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
56	弥生土器	高杯	溝234		(5.7)		2.5Y7/2灰黄	密（φ6.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
57	弥生土器	高杯	溝234		(7.1)		7.5YR7/4にぶい橙	密（φ4.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）
58	弥生土器	高杯	溝234		(7.3)		10YR8/2灰白	密（φ6.0㎜以下の長石、石英、チャートを含む）

No.	器種	器形	出土遺構	口径	器高	底径	色調	胎　　土
59	弥生土器	高杯	溝234		(6.9)		7.5YR7/4にぶい橙	密（φ2.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）
60	弥生土器	器台	溝234	17.5	(2.6)		10YR8/2灰白	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
61	弥生土器	器台	溝234	18.1	(4.1)		7.5YR7/4にぶい橙	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
62	弥生土器	器台	溝234	17.8	(8.5)		10YR7/2にぶい黄橙	密（φ4.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
63	弥生土器	器台	溝234	18.7	(9.8)		10YR7/3にぶい黄橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
64	弥生土器	器台	溝234	16.1	10.9	14.2	2.5YR6/3にぶい橙	密（φ5.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
65	弥生土器	器台	溝234	16.8	10.5	13.1	2.5YR6/6橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
66	弥生土器	器台	溝234		(6.3)		7.5YR7/2明褐灰	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
67	弥生土器	器台	溝234		(7.6)		7.5YR7/3にぶい橙	密（φ3.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
68	黒色土器B	椀	柱穴37	13.3	4.9	6.8	10YR4/1褐灰	密（φ2.0mm以下の長石、石英、チャートを含む）
69	土師器	皿	柵1 柱穴224	10.9	(2.0)		7.5YR8/3浅黄橙	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、雲母、赤色粒子を含む）
70	土師器	皿	柵1 柱穴224	11.7	(1.9)		7.5YR7/4にぶい橙	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
71	瓦器	椀	柱穴202	13.5	4.6	4.4	N5/0灰	密（φ1.0mm以下の長石、石英を含む）
72	瓦器	椀	井戸111 木枠内	14.0	(2.9)		N5/0灰	密（φ1.0mm以下の長石、石英、黒色粒子を含む）
73	瓦器	椀	井戸111 木枠内	13.5	(3.5)		N4/0灰	密（φ0.5mm以下の長石、石英、黒色粒子を含む）
74	瓦器	椀	井戸111	13.4	4.6	4.6	N4/0灰	密（φ1.5mm以下の長石、石英、黒色粒子、赤色粒子を含む）
75	瓦器	椀	井戸205	13.0	(3.2)		N5/0灰	密（φ0.5mm以下の長石、石英を含む）
76	瓦器	椀	井戸205	13.8	(2.9)		N5/0灰	密（φ0.5mm以下の長石、石英を含む）
77	瓦器	椀	井戸205 掘形	12.5	4.2	3.3	N5/0灰	密（φ0.5mm以下の長石、石英を含む）
78	土師器	皿	柵3 柱穴231	8.3	(1.8)		7.5YR8/3浅黄橙	密（φ0.5mm以下の長石、石英、チャートを含む）
79	土師器	皿	柵3 柱穴179	11.2	(2.5)		7.5YR8/4浅黄橙	密（φ1.0mm以下の長石、石英、チャート、赤色粒子を含む）
80	輸入陶磁器 白磁	椀	建物3 柱穴137	14.0	(3.6)		胎:2.5Y8/1灰白 釉:5GY7/1明オリーブ灰	密
81	瓦器	火鉢	井戸203		(5.5)		N4/0灰	密（φ1.5mm以下の長石、石英を含む）
82	輸入陶磁器 青磁	椀	井戸203		(1.2)	2.9	胎:N6/0灰 釉:2.5GY6/1オリーブ灰	密
83	輸入陶磁器 青磁	杯	井戸203		(2.2)	8.5	胎:N7/0灰色 釉:10Y6/2オリーブ灰	密（φ0.5mm以下の長石、黒色粒子を含む）
84	輸入陶磁器 白磁	皿	井戸203		(1.2)	4.5	胎:5Y7/1灰白 釉:7.5Y7/2灰白	やや密（φ3.0mm以下の長石、チャートを含む）
85	焼締陶器	甕	井戸203		(5.1)		胎:10YR6/1褐灰 釉:10YR2/1黒	密（φ2.0mm以下の長石を含む）

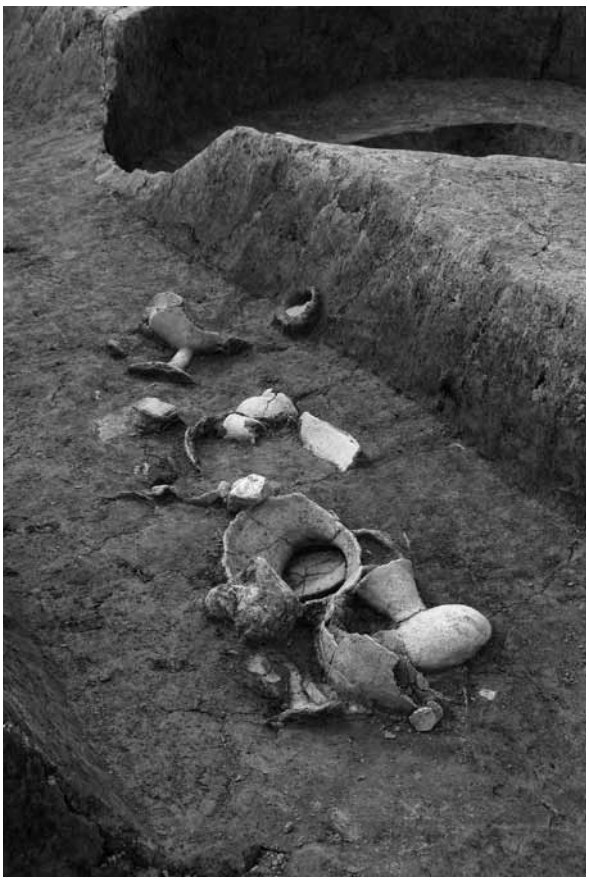
付表２　瓦類・石製品・木製品一覧表

	No.	種類	出土遺構	法量(cm)	色調	備　　考
瓦類	瓦1	平瓦	井戸203	長さ(14.8)、幅(14.0)、厚さ(2.1)	N4/0灰	胎土密（φ0.9mm以下の長石、チャートを含む）
石製品	石1	石器剥片	柱穴106	長さ(6.2)、幅4.6、厚さ1.1	N6/0灰	
	石2	砥石	井戸203	長さ(8.8)、幅4.5、厚さ2.1	10YR8/3浅黄橙	
木製品	木1	曲物	井戸111	径16.1、高さ15.5		
	木2	曲物	井戸111	径18.3、高さ9.0		
	木3	曲物底板	井戸203	径(14.2)、厚さ0.9		

図　　版

1　第1期全景（西から）

2　溝234土器出土状況（北から）



3　溝234土器群（北東から）

図版２　遺構

１　第２期全景（西から）

２　建物１・柱列１（西から）

1　井戸111枠内（南から）

2　井戸203枠内（南から）

3　建物１柱穴166（北から）

4　建物２柱穴123（南から）

5　建物３柱穴40（南から）

6　建物３柱穴254（東から）

11

12

13

15

17

21

20

土器類 1

1

23

42

37

44

45

38

47

土器類２

46

48

50

62

52

64

53

65

68

71

土器類３

報　告　書　抄　録

ふ り が な	おおやぶいせき・しもくぜかまえあと
書　　名	大藪遺跡・下久世構跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０１８－５
編 著 者 名	末次由紀恵
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2019年２月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大藪遺跡（おおやぶいせき） 下久世構跡（しもくぜかまえあと）	京都市南区（きょうとしみなみく） 久世殿城町（くぜとのしろちょう） 526番地の１	26100	773 777	34度 57分 18秒	135度 43分 06秒	2018年９月10日～2018年10月23日	309㎡	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大藪遺跡 下久世構跡	集落跡 平城跡	弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝墓、溝	弥生土器、布留式土器、石製品	
		平安時代	建物、柱列、柱穴	黒色土器	
		鎌倉時代	建物、柵、溝、井戸	土師器、瓦器、木製品	
		室町時代	建物、柵、井戸	土師器、焼締陶器、輸入磁器、瓦類、石製品、木製品	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018-5

大藪遺跡・下久世構跡

発行日　2019年２月28日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の１
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961